マルクスの「資本の過多Plethora of Capital」概念の形成

松　尾　　純

『桃山学院大学経済経営論集』第54巻第2号抜刷
2012年10月

マルクスの「資本の過多Plethora of Capital」概念の形成

松　尾　　純

Ⅰ. はじめに

現行版『資本論』第3部第3篇「利潤率の傾向的低下の法則」第15章「法則の内的諸矛盾の展開」には，マルクスの方法に沿って恐慌論を展開する際の重要な手掛かりとなる諸命題が多数含まれている。それらのうちで最重要な命題の一つが，第15章第3節に展開されているマルクスの「資本の過剰生産」論である。

筆者は，かつて，佐藤金三郎氏による『資本論』第3部草稿筆写ノート[1]を利用する機会を得て，この問題に関係する草稿部分を詳細に分析し，筆者独自の理解を示すとともに，従来の諸理解の再検討を行なった[2]。その後1993年にKarl Marx／Friedrich Engels Gesamtausgabe, Abt.Ⅱ, Bd.4, Teil 2として公刊された『資本論』第3部草稿[3]によってはじめてオリジナルに近

1) このいわゆる佐藤金三郎「アムステルダム・ノート」は，大阪市立大学大学史資料室によって第22回展示第1期（2009年2月～7月）の「大阪市立大学の学術標本」として展示された。詳しくは，『大阪市立大学史紀要』第3号，2010年に紹介されている。

2) 拙稿「マルクスの『資本の過剰生産』規定について－『資本論』第3部第3篇第15章第3節の分析を中心にして－」，『経済学雑誌』第79巻第4号，1979年3月。

3) Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1863–67*, in : *Karl Marx／Friedrich*

キーワード：資本の過剰生産，資本の絶対的過剰生産，資本の過多，『資本論』第3部草稿，1861–63年草稿

い形で論争における問題箇所が分析・検討できるようになったので，草稿第3章「資本主義的生産の進展につれての一般的利潤率の傾向的低下の法則」（草稿203～242ページ）のうちの221～242ページ部分（エンゲルス編集『資本論』第3部第3篇版第15章に対応する草稿部分），とりわけ231～237ページ部分（同じく第15章第3節に対応する草稿部分）におけるマルクスの「資本の過剰生産」論を改めて詳しく分析・検討する作業を続けてきた[4]。これらの研究を通じて，筆者は，マルクスが「資本の過剰生産」をどのように概念化し，それが彼の恐慌論体系においてどのように位置付けられていたかということを，『資本論』とその準備草稿における論述にできるかぎり即して解明する作業を行ってきた。

ところで，筆者は，このマルクスの「資本の過剰生産」概念の分析過程において，常に疑問に思いながらも，なかば不問に付してきた問題がある。それは，マルクスが「資本の過剰生産」に言及する際たえずそれに付随して言

Engels Gesamtausgabe (MEGA), Abt.Ⅱ, Bd.4, Teil 2, 1992［実際には周知のように1993年発行］, Dietz Verlag. 以下，この書をＭＥＧＡⅡ-4-2と略記する。引用に際しては，引用箇所を，引用ページとそれに対応するMEW版『資本論』(Karl Marx, *Das Kapital*, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd.25, Dietz Verlag, Berlin, 1964）およびその邦訳（岡崎次郎訳『資本論』大月書店，国民文庫版(6), (7), (8), 1972）の引用ページを次のように略記して示す。例，ＭＥＧＡⅡ-4-2, S. 221；MEW, Bd. 25, S. 1974；『資本論』(6), 234頁。なお，訳文については，現行版と「草稿」との異同が理解しやすいように，現行版『資本論』の訳文をベースにして，原文が異なる場合だけ新たな訳文を当てた。その際，先行訳である以下の大谷禎之介訳を参考にした。大谷禎之介「『貨幣資本と現実資本』（『資本論』第3部第30-32章）の草稿について－第3部第1稿の第5章から－」『経済志林』第64巻第4号，1997年3月。同「『信用制度下の流通手段』および『通貨原理と銀行立法』（『資本論』第3部第33章および第34章）の草稿について『資本論』第3部第1稿の第5章から－」『経済志林』第67巻第2号，1999年11月。同「『貴金属と為替相場』(『資本論』第3部第35章)の草稿について－『資本論』第3第1稿の第5章から－」『経済志林』第69巻第3号，2001年12月。

4) 拙稿「マルクスの『資本の過剰生産』論――再論・『資本論』第3部「主要草稿」を踏まえて――」『経済経営論集』（桃山学院大学）第36巻第2号，1994年12月。同「『現実の資本の過剰生産』と『資本の絶対的過剰生産』――前畑憲子氏の批判に応える――」『経済経営論集』（桃山学院大学）第43巻第4号，2002年3月。同「マルクスの『現実の資本の過剰生産』概念について」『経済経営論集』（桃山学院大学）第50巻第3号，2008年12月。

及する「資本の過多」という用語である。マルクスの「資本の過剰生産」論を分析・検討しながらも，マルクスが常に言及する<「資本の過多」とは何なのか>という疑問を懐いてきた。しかし，いまや，マルクスの<「資本の過多」とは何なのか>という問題を，正面から取り上げて，考えてみようと思う。

Ⅱ.「1861-63年草稿」ノートXⅥにおける「資本の過多」論

『資本論』とその準備草稿においてマルクスがはじめて自身の言葉で「資本の過多」に言及しているのは，「1861-63年草稿」ノートXⅥ記載の草稿「第3章 資本と利潤」における以下の箇所においてである[5)]。

①「それでは，このような一般的利潤率の低下傾向は何が原因で生じるのか？この問題に答える前に，われわれは，この低下傾向がこれまでブルジョア経済学の大きな不安の種になってきたことを指摘しておくことができる。リカードウ学派やマルサス学派の全体は，この過程がひき起こすにちがいないであろう最後の審判の日のために悲痛な叫び声をあげている。というのは，資本主義的生産は利潤の生産なのだから，この利潤が減少するにつれて

5) 本稿Ⅲの分析対象である「1861-63年草稿」ノートXⅢでなくて，「1861-63年草稿」ノートXⅥ記載草稿「第3章 資本と利潤」を本稿Ⅱにおいて先行して分析対象としたのは，マルクスの執筆時期が，後者の草稿部分の方が先立っているからである。この点については，以下の論稿を参照。拙稿「1861-63年草稿記載の『第3章 資本と利潤』の作成時期について」『経済経営論集』(桃山学院大学)第26巻第1号，1984年6月。大村泉「一般的利潤率・生産価格と剰余価値の利潤への転化」『北海学園大学経済論集』第30巻第3号，1982年12月。同「生産価格と『資本論』第3部の基本理論(上)(中)(完)」『経済』227，228，229号，1983年3，4，5月。服部文男「マルクス・エンゲルス研究の最近の動向と課題」『経済』237号，1984年1月。大村泉「論文集『「資本論」第二草稿』(Der zweite Entwurf des 〉Kapital〈)(ベルリン，1983年)の刊行によせて(上)」『経済』240号，1984年4月。
本稿での分析・考察が，「1861-63年草稿」ノートXⅢの「資本の過剰生産」・「資本の過多」論と「1861-63年草稿」ノートXⅥ記載の草稿「第3章 資本と利潤」の「資本の過剰生産」・「資本の過多」論とを比較することになり，その結果，ノートXⅥ記載草稿「第3章 資本と利潤」におけるマルクスの「資本の過多」論の方が熟成度が低いということを追加的に論証することになったのではないかと思う。

その生産の刺激やその生産の生き生きとした魂を喪失することになるからである。これにたいして，他の経済学者たちは，負けず劣らず特徴的ないろいろな慰めになる理由をこれまでにもちだしてきた。ところが，理論と並んで実際に現われるのは，資本の過剰（superabundance of capital）から生ずる恐慌であり，または同じことになるが，利潤率低下の結果として資本が踏み込む無謀な冒険である。このことから，恐慌が，――フラートンを見よ――資本の過多(プレトラ)(plethora of capital)を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段として認められている恐慌が，起こるのである。」[6) 7)]。

引用文①が登場するのは，「1861-63年草稿」ノートXⅥ記載の草稿「第3章 資本と利潤」の第「7」節冒頭文節において，「われわれは，多数の諸資本間の競争に立ち入ることなしに，一般的法則をこれまでに展開された資本の一般的性質から直接に導きだすことができる確かな基礎に立脚している

6) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863)*, in : *Karl Marx／Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt.Ⅱ, Bd.3, Teil 5, 1980, Dietz Verlag, S.1633. 以下，この書をＭＥＧＡⅡ-3-5と略記する。引用に際しては，引用箇所を，引用ページと，その邦訳（『マルクス資本論草稿集』⑧大月書店，1984年）の引用ページを，例えば次のように略記して示す。ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1633：草稿集⑧145頁。

7) マルクスは，恐慌は「資本の過多(プレトラ)(plethora of capital)を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段」であるという認識を，フラートン『通貨調節論…』，ロンドン，1844年，165ページから得たものと思われる。というのは，フラートンが同書同箇所で次のように述べていることを，マルクスは「1857－58年草稿」ノートⅦ・50ページに引用・紹介しているからである。「『資本の周期的な破壊は，いかなる市場利子率の存在にとっても不可欠な条件となってしまった。そしてそのような観点から考察すると，この恐るべき災厄を，われわれはいつもこれほどの不安と憂慮とをもって予期するようになっており，しかもそれを回避することをこれほど切望しているにもかかわらず，この災厄は，成長しすぎて肥大化した富裕の自然的かつ必然的な矯正策にすぎず，現在のような体質のわれわれの社会システムが，たえず繰り返してその存続を脅す過多(plethora)から時おり自分自身を救いだし正常で健全な状態を取り戻すことを可能にする，治癒力にすぎないのかもしれない。』（フラートン（ジョン・）『通貨調節論……』，ロンドン，1844年，165ページ[福田長三譯『通貨論』岩波文庫，昭和16年，214－215頁―第2版原書，1845年の訳本]）」（Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857-58* in : *Karl Marx／Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt.Ⅱ, Bd. 1, Teil 2, 1981, Dietz Verlag, S.713:『マルクス資本論草稿集』②大月書店，1993年，749－750頁）。

のである。この一般的法則こそが，資本主義的生産の進行に伴って利潤率は低下する傾向をもつという法則なのであり，これこそが経済学の最も重要な法則なのである。」[8]と述べた直後においてである。マルクスは，なぜか「法則」についてこのように殆ど議論をすることなく，直ちに，「資本の過多」に言及している。すなわち，「このような一般的利潤率の低下傾向は何が原因で生じるのか？」と問題提起するが，その「原因」探求の議論に入らずに，「この問題に答える前に，われわれは，この低下傾向がこれまでブルジョア経済学の大きな不安の種になってきたことを指摘しておくことができる」と述べ，「資本の過剰（superabundance of capital）から生ずる恐慌」・「利潤率低下の結果として資本が踏み込む無謀な冒険」・「資本の過多(plethora of capital)を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段として認められている恐慌」というブルジョア経済学者たちの不安について指摘する論述を続けている。

引用文①に関して，筆者が最も注目するのは，「資本の過剰」・「資本の過多」という文言をマルクスが突然持ち出しているにもかかわらず，それらの意味内容を一切説明していないと言うことである。<「資本の過剰」・「資本の過多」とは何なのか>ということは，ここでは何故か，一切不問にされている。

引用文①の論述のあと，マルクスは，「資本主義的生産の進行に伴う利潤率の低下に関する一般的法則」について，『資本論』とは内容的に共通する議論を，ただし余り体系的でない形で展開している。例えばこうである。

「一般的利潤率が低下することができるのはただ次の二つのことからだけである。／一，剰余価値の絶対量が減少するという場合。…／二，不変資本にたいする可変資本の割合が減少するという理由から。…利潤率は，可変資本にたいする不変資本の割合が大きくなればなるほど，ますます小さくなる。」[9]。

8) ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1632：草稿集⑧ 144 頁。
9) ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1634-1635：草稿集⑧ 147－148 頁。

「資本主義的生産の発展法則というのはまさに，可変資本が…資本の不変的成分…に比較して絶えず減少するということなのである」[10]。

「総資本量にたいする可変資本の割合が変わるということによって，利潤率が下がる」[11]。

「したがって，一般的利潤率の低下傾向は，資本の生産力の発展に，すなわち対象化された労働が生きている労働と交換される割合の増大に，等しい。」[12]。

「生産力の発展は二重に現われる。〔第一には，〕すでに生産されている生産力の大きさに，新たな生産が行なわれるための生産条件の価値の大きさと量の大きさとに，すなわち，すでに蓄積されている生産資本の絶対量に，現われる。第二には，労賃に投ぜられる資本が総資本に比べて相対的に小さいということに，すなわち，より大きな資本の再生産と搾取とに――大量生産に――必要な生きている労働が相対的に小さいということに，現われる。」[13]。

「生産力の発展は二重に現われる。〔第一には〕剰余労働の増大に，すなわち必要労働時間の短縮に，――そして〔第二には〕，資本のうち生きている労働と交換される成分が，資本の総量に比べて，すなわち資本のうち生産にはいってゆく総価値に比べて，減少するということに〔現われる〕。（「剰余価値」や「資本」等々を見よ。）または，違った表現をすれば，〔第一には，〕充用される生きている労働の搾取の増大…に現われるし，また〔第二には，〕一般に充用される生きている労働時間の相対的な量の――すなわち，生きている労働が動かす資本に比べてのこの生きている労働の量の――減少に現われるのである。この二つの運動は，ただ［いっしょに］進行するだけではなく，それらは互いに制約し合っており，また同じ法則がそこに表現さ

10）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1635：草稿集⑧ 148頁。
11）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1635：草稿集⑧ 149頁。
12）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1636：草稿集⑧ 150頁。
13）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1636：草稿集⑧ 150頁。

れる二つの違った形態および現象にほかならない。とはいえ，それらは，利潤率が考察されるかぎりでは，反対の方向に作用する。利潤は総資本にたいする関係におかれた剰余価値であり，利潤率は，この剰余価値が資本の一定の度量単位に応じて，たとえば百分率で，計算された割合である。ところが，剰余価値は――総額としては――第一に剰余価値率によって，第二にはまたこの率で同時に充用される労働の量によって，または，同じことであるが，資本の可変部分の大きさによって，規定されている。一方では，剰余価値率が上昇し，他方では，この率に掛ける因数が（相対的に）減少する。生産力の発展が充用労働の必要（支払）部分を減らすかぎりでは，それは，剰余価値率を高くするので，または百分率で表現される剰余価値率を高くするので，剰余価値を増大させる。しかし，その発展が，与えられた一資本によって充用される労働の総額を減らすかぎりでは，それは，剰余価値率に掛ける因数を，したがって剰余価値量を，小さくする。」[14]。

「ある与えられた資本量では（ある与えられた資本の規模に比例して）24人の労働者ではなく，ただ2人の労働者しか就業させられないか，または，ある与えられた資本量に比例して古い生産方法では24人の労働者が必要な場合に新たな生産方法では2人の労働者が必要であるとすれば，また古い生産方法での剰余労働は総労働日の1／12すなわち1時間に等しいとすれば，生産力の増進によって――たとえ剰余労働時間の率がどのように高められるとしても――古い生産方法で24人の労働者が生みだしていたのと同じ量の剰余価値を2人の労働者が生みだすということは，起こらない。」[15]。

「だから一般的には次のとおりである。平均利潤率の低下は，労働の生産力または資本の生産力の増大を表わしており，同時に，一方では充用される生きている労働の搾取の増進を，そして［他方では］一定額の資本について計算された，増進された搾取度で充用される生きている労働量の相対的減少

14) ＭＥＧＡⅡ-3-5, S. 1637：草稿集⑧152－153頁。
15) ＭＥＧＡⅡ-3-5, S. 1638：草稿集⑧155頁。

を表わしているのである。」[16]。

「ところで，このような法則の結果として，自然に，資本の蓄積が減少したり，利潤の絶対量が…減少したりするということは生じない。」というのは，「6% の利潤をあげる1万の資本のほうが12% の利潤をあげる500の資本よりも蓄積の速度は速い」からである[17]。

以上が，引用文①以後に展開されている「利潤率の低下に関する一般的法則」論であるが，その内容は，先に指摘したように概ね『資本論』の利潤率低下法則論に対応する内容を含むものである。この利潤率低下論を受けて，マルクスは，さらに次のような「資本の過多」に関する論述を行っている。

②「こうした利潤率の低下につれて，労働を生産的に充用するために一般に必要とされる資本の最小限――または資本家の手になければならない高さの生産手段の集積――は増大する。この最小限は，労働を搾取するためにも，また，ただ生産物を生産するために社会的に必要とされる必要労働時間を充用するためだけにも，必要なのである。それと同時に蓄積も，すなわち集積も増大する。というのは，利潤率の低い大資本のほうが利潤率の高い小資本よりも急速に蓄積を進めるからである。この増大する集積は，それ自身また，ある一定の高さに達すれば，再び利潤率の新たな低下をひき起こす。そのために，より小さな分散した諸資本の大群はわれ先に冒険〔の道へ駆り立てられる〕。このために恐慌〔へと追いこまれる〕。いわゆる資本の過多（Die s.g. Plethora des Capitals）は，いつでもただ，利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多（Plethora von Capital）にだけ関連している。（フラートンを見よ。）」[18]。

この引用文②の論述では，先行する利潤率低下論を受けて，マルクスは，利潤率低下と「資本の過多」との関係について，引用文①よりは進んだ・多少とも内容の伴った論述を行うことができるようになっていると見ることが

16）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1639：草稿集⑧157頁。
17）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1639：草稿集⑧157頁。
18）ＭＥＧＡⅡ-3-5，S. 1640：草稿集⑧158頁。

できよう。というのは，ここで，マルクスは，「利潤率の低下」が進行すれば，「資本の最小限」が「増大」すると同時に「集積も増大する」が，この「増大する集積」が「ある一定の高さに達すれば，再び利潤率の新たな低下」を引き起こす，その結果「より小さな分散した諸資本の大群」はもはや「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本」が発生する状況＝「資本の過多」状況が発生することになる，と述べているからである。

因みに，ここでの説明――すなわち「利潤率の低下」から始まって「資本の過多」に至る事態の推移の説明――は，『資本論』第3部第3篇第15章第3節におけるマルクスの次の説明と殆ど同じ内容であると見ることができよう。

「利潤率の低下につれて，労働の生産的充用のために個々の資本家の手になければならない資本の最小限は増大する。この最小限は，労働の搾取一般のためにも，また充用労働時間が商品の生産に必要な労働時間であるためにも，すなわち充用労働時間が商品の生産に社会的に必要な労働時間の平均を越えないためにも，必要である。それと同時に集積も増大する。なぜならば，ある限界内では，利潤率の低い大資本のほうが利潤率の高い小資本よりも急速に蓄積を進めるからである。この増大する集積は，それ自身また，ある高さに達すれば，利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって，分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機，信用思惑，株式思惑，恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多は，つねに根本的には，利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本――そして新たに形成される資本の若枝はつねにこれである――の過多に，または，このようなそれ自身で独自の行動をする能力のない資本を大きな事業部門の指導者たちに信用の形で用だてる過多に，関連している。」[19]。

引用文②の「資本の過多」の説明とこの『資本論』での「資本の過多」の

19) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S. 324-325：MEW, Bd. 25, S. 261：『資本論』(6), 409－410頁)。

説明とは，ともに，<「利潤率の低下」の結果として「資本の過多」が発生する，「利潤率の低下」の結果として「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本」が発生する>と説明している。したがって，ここでの「資本の過多」概念は,「資本の過剰生産」・「資本の絶対的過剰生産」概念と同じであると見ることができる。実際，マルクスは「資本の過剰生産」・「資本の絶対的過剰生産」について，「資本の過多」に与えたのと同じような説明を行っている。上の『資本論』からの引用文に続けて，マルクスは次のように言う。

「それゆえ，個々の商品の過剰生産ではなく資本の過剰生産Ueberproduction von Capital（＝資本の過多Plethora von Capital)――といっても資本の過剰生産はつねに商品の過剰生産を含んでいるのだが――の意味するものは，資本の過剰蓄積以外のなにものでもないのである。…／資本主義的生産を目的とする追加資本がゼロになれば，そこには資本の絶対的過剰生産があるわけであろう。…労働者人口に比べて増大した資本が増大しすぎて(das gewachsne Capital in einem Verhältniß gewachsen wäre, zur Arbeiterbevölkerung)，この人口が供給する絶対的労働時間も延長できないし相対的剰余時間も拡張できないようになれば…つまり増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより少ない剰余価値――われわれはここで言っているのは，利潤の絶対的な量についてであって，利潤の率についてではない――しか生産しなくなれば，そこには資本の絶対的過剰生産が生じるわけであろう。すなわち，もとのC＋ΔCがP（もしこれがCによって生産された利潤の総計とすれば）だけか，または，P－xしか生産しないであろう。どちらの場合にも一般的利潤率のひどい突然の低下が起きるであろう」[20]。

「資本の過剰生産（＝資本の過多）Ueberproduction von Capital(=Plethora von Capital)」という等式記号を伴う端的な表現に見られるように，マルクスは，「資本の過剰生産」と「資本の過多」とを等置し，しかもそれら

20) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S.325-326：MEW, Bd.25, S.261-262：『資本論』(6)410-411頁)。

について「増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより少ない剰余価値…しか生産しなくなれば…生じる」と説明しているのである。用語上も，概念規定の説明でも，マルクスは，両者を同じ概念として説明しているのである。

③「…ここではついでに次のことを言っておくことができる。すなわち，剰余価値率の上昇と利潤率の減少とを伴うこのような大規模の生産は――巨大な生産を，つまり諸使用価値の消費を前提しており，したがって周期的に絶えず過剰生産（Ueberproduction）に陥るのであって，この過剰生産は市場の拡大によって周期的に解消される，ということである。〔それが起こるのは，〕需要が不足するからではなく，支払能力が不足するからである。というのは，この同じ過程は，絶えずより大きな規模でのプロレタリアートを前提するのだから，必要生活手段を越えてふえてゆく需要をいちじるしくかつ累進的に制限するし，他方それと同時にこの過程は需要の範囲の不断の拡大を制約するからである。マルサスが正しく述べているように，資本家にとっては労働者の需要で十分だということはけっしてありえないのである。資本家の利潤は，まさに労働者の供給がその需要を越える超過分のうちにある。また，どんな資本家もこのことを自分自身の労働者については理解しているのであり，ただ，自分の商品を買う他の資本家の労働者について理解していないだけである。対外貿易，奢侈品生産，国家の濫費（国家支出の増大等々）――固定資本の大量の消費等々は，この〔過剰生産の〕過程を抑制する。（それだからこそ，マルサスやチャーマズ等によって冗職や国家と不生産階級との浪費が万能薬として推奨されたのである。）依然として奇妙なのは，同じ経済学者たちが周期的な資本の過剰生産（Ueberproduction von Capital）を認めながら（周期的な資本の過多（Plethora des Capitals）は現代のすべての経済学者たちによって認められている），周期的な商品の過剰生産（Ueberproduction von Waaren）を否定しているということである。まるでどんな簡単な分析であっても，この二つの現象は同じ二律背反をただ別々の形態で表現しているだけであるということを証明してはならないかの

ようである。」]21)。

この引用文③では，まず，マルクスは，「剰余価値率の上昇と利潤率の減少とを伴う…大規模の生産」の結果，「周期的に絶えず過剰生産（Ueberproduction）に陥る」のであるが，「この過剰生産は市場の拡大によって周期的に解消される」と説明し，そして，この「過剰生産」は，正確に言えば「周期的な商品の過剰生産（Ueberproduction von Waaren）」のことであるが，この「商品の過剰生産」と，「周期的な資本の過剰生産（Ueberproduction von Capital）」・「周期的な資本の過多（Plethora des Capitals）」とは，「同じ二律背反をただ別々の形態で表現」したものであると説明している。つまり，マルクスは，「1861-63年草稿」執筆のこの段階では，「商品の過剰生産」と「資本の過剰生産」「資本の過多」とを余り区別せず，むしろ両者を同値のものと見なしていたと見ることができる。

以上が，「1861-63年草稿」における最初の段階（ノートXⅥ）の「資本の過多」に関する論述である。上記3箇所は，すべて，草稿「第3章　資本と利潤」の「7)」前半の「資本主義的生産の進行に伴う利潤率の低下に関する一般的法則」論での論述である。ここでは，マルクスは，「資本の過多」について，その概念内容，発生原因などについて殆ど説明を加えていないし，また，「資本の過剰生産」と「資本の過多」とを殆ど無区別に論述していると言えよう。

Ⅲ.「1861-63年草稿」ノートXⅢにおける「資本の過多」

「1861-63年草稿」ノートXⅥおよびノートXⅦ冒頭記載の草稿「第3章　資本と利潤」および「雑録」擱筆後，マルクスは，「1861-63年草稿」ノートⅥ～XⅤに「5.剰余価値に関する諸学説」（いわゆる『剰余価値学説史』）を執筆する。この『剰余価値学説史』途中のノートXⅢにおいてはじめて，マルクスは，「資本の過多」について，さきの草稿「第3章　資本と利潤」に

21）ＭＥＧＡⅡ-3-5, S. 1641：草稿集⑧159－160頁。

おけるよりも遙かに詳しい議論を展開している[22)]。

「1861-63年草稿」・ノートXⅢの694～732ページ部分の後半（705～732ページ）――『剰余価値学説史』第17章の後半部分（第6節以降）――において，マルクスは，リカードの恐慌論を批判しつつ自己の恐慌論体系を展開し，その後半部分において「資本の過剰生産」・「資本の過多」について自説を展開している。それは，まさに，内容のある議論を伴うマルクスの「資本の過剰」論・「資本の過多」論の出発点とも言うべき論述である。以下，マルクスの「資本の過多」論の形成過程の起点の意味を能く理解するために，そこに至るマルクスの議論を少しく概観しておこう。

ノートXⅢ 694～732ページ部分――『剰余価値学説史』第17章部分――は3つの大きな部分から成っている。第Ⅰの部分（ノートXⅢ 694-704ページ）は，不変資本部分の存在を無視して展開されたリカード蓄積論を批判しつつ，マルクスが再生産の問題を単純再生産と拡大再生産の2つの場合に分けて考察している部分。第Ⅱの部分（ノートXⅢ 704-726ページ）は，部分的過剰生産は発生しうるが一般的過剰生産は発生しえないとするリカードの主張を批判しつつ，過剰生産はどのような原因によって発生するのか，また，それはどのようにして一般的過剰生産として現出するのかということを究明しようとした部分。第Ⅲの部分（ノートXⅢ 726-732ページ）は，リカード蓄積論に関する雑録であり，内容的にはむしろ次の「リカード雑論」部分（ノートXⅢ 732-752ページ）に含められるべき部分。本稿との関係で言えば，第1部分と第2部分が重要であり，ここでの議論の中身をもう少し見ていこう。

第Ⅰ部分（ノートXⅢ 694-704ページ）は2つの部分に分かれている。前半部分（ノートXⅢ 694-704ページ）では，＜資本の蓄積＝収入の賃金

22) 筆者は，かつて，「1861-63年草稿」ノートXⅢ（いわゆる『剰余価値学説史』第17章）におけるマルクスの過剰生産論を詳しく分析したことがある。拙稿「『剰余価値学説史』における過剰生産論――第17章の分析を中心にして――」『山形大学紀要（社会科学）』第11巻第1号，1980年7月。本稿Ⅲの考察は，そこでの分析結果を踏まえたものである。

への転化>とするリカードの見解では，「蓄積の全問題はまちがった取り扱いを受けることになる」[23]；リカード蓄積論を批判するには「なによりもまず必要なことは，不変資本の再生産を明らかにしておくことである」[24]として，「不変資本の再生産」問題を中心に単純再生産の問題を考察している。後半部分（ノートXⅢ 697−704ページ）では，リカード蓄積論を批判するために蓄積・拡大再生産の問題を考察する。まず，リカードの一般的過剰生産否定論を批判しつつ，マルクスは自身の過剰生産論を展開しようとしている。続いて，「恐慌の可能性」・「さらに発展した恐慌の基礎」について論じているが，これに続けて，マルクスは過剰生産に関する議論を展開する。

ここでのマルクスの過剰生産論には，次の2つの論題が含まれている。1つは，「[商品の]過剰生産Ueberproduction [von Waaren, overproduction]」論であり，もう1つは，「資本の過剰生産surproduction of capital」・「資本の過多plethora of capital」・「資本の過剰superabundance of capital」論である。

マルクスが「商品の過剰生産」論を本格的に論じ始めているのは草稿711−712ページ[25]部分である。マルクスは，リカードの主張<「ある特殊な商品があまりにも多く生産されすぎて，それに支出された資本を償いえないほどに市場で供給過剰になるということは，ありうるであろう。しかし，このことはすべての商品については起こりえない。」[26]>を批判して次のように言

23) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861−1863)*, in : *Karl Marx／Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt.Ⅱ, Bd. 3, Teil 3, 1978, Dietz Verlag, S.1094. 以下，この書をＭＥＧＡⅡ−3−3と略記する。引用に際しては，引用箇所を，引用ページとその邦訳（『マルクス資本論草稿集』⑥大月書店，1981年）の引用ページを例えば次のように略記して示す。ＭＥＧＡⅡ−3−3，S. 1094：草稿集⑥666−667頁。

24) ＭＥＧＡⅡ−3−3，S. 1094：草稿集⑥667頁。

25) ＭＥＧＡⅡ−3−3，S. 1126−1129 ：草稿集⑥708−712頁。

26) David Ricardo, *On The Principles of The Political Economy, and Taxation*, London, John Murray, 1817, S.403. (*The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol.I, *On The Principles of Political Economy and Taxation*, S.292, Cambridge University Press, 1951:『リカードウ全集Ⅰ』堀経夫訳，雄松堂書店，1972年，336ページ。)

う。「『市場の供給過剰』を形成しうるのは特殊な種類の商品だけであってすべての種類の商品ではないということ，したがって過剰生産はつねに部分的でしかありえないということ，これはつまらない逃げ口上である。…商品の変態の一般的性質は…，一般的供給過剰の可能性を排除するのではなく，むしろ，一般的供給過剰の可能性そのものなのである。」[27]，と。

しかし，このマルクスのリカード批判には論理的限界が存在する。というのは，マルクスは，一般的過剰生産が発生する「可能性」が存在することを主張しているだけであって，それによって，販売と購買とがなにゆえに分離せざるをえなくなるのか，過剰生産はどのような事情によって一般的過剰生産という姿をとって現出するのかという問題を解明することができていないからである。マルクスはこの限界を克服するためにか，過剰生産の発生根拠について議論を展開していく。「過剰生産は，ただ，支払能力のある欲望に関係があるだけである。…過剰生産のさいにいっそう奇妙なことは，市場に過剰に供給されている商品そのものの本来の生産者たち――労働者たち――に商品が欠乏している，ということである。」[28]。「生産者の最大の部分である労働者が自分たちの生産物にたいする等価物を消費することができるのは，彼らがこの等価物よりも多くのもの――剰余価値すなわち剰余生産物――を生産するあいだだけである…。彼らは，自分たちの欲望の限界内での消費者すなわち買い手でありうるためには，絶えず過剰生産者 *Ueberproducenten* でなければならず，自分たちの欲望を越えて生産しなければならない。」[29]。「一方では必需品の範囲内に閉じ込められている生産者大衆を基礎とし，他方では資本家の利潤による制限を基礎とする，生産諸力の無制約の発展，したがってまた大量生産，これこそが近代的過剰生産の基礎をなすものである。」[30]。「過剰生産は，特に資本の一般的な生産法則を条件としている。す

27) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1126：草稿集⑥708頁。
28) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1128：草稿集⑥711頁。
29) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1141-1142：草稿集⑥729頁。
30) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1149：草稿集⑥740頁。

なわち，生産力…に応じて，市場と支払可能な欲望との現存する限界を顧慮することなく，生産するということ――そして，このことを，再生産と蓄積との不断の拡大…によって遂行するということ，同時に他方では生産者大衆が欲望の平均的程度に制限されたままであり，資本主義的生産の体質から見て制限されたままでなければならないということ，こうしたことを条件としている」[31]。

以上，見られるように，マルクスは，「市場と支払可能な欲望との現存する限界を顧慮」しない生産の拡大と「必需品の範囲内に閉じ込められている」生産者大衆の欲望との矛盾，これこそが過剰生産の究極の根拠である，と考えている。因みに，このような「過剰生産」の根拠規定は，『資本論』の規定――すなわち「すべての現実の恐慌の究極の原因は，つねに，一方では大衆の窮乏，他方では生産諸力を，まるで社会の絶対的な消費能力がそれの限界をなすかのように発展させようとする資本主義的生産様式の衝動なのである」[32]であるとする規定――と同主旨のものである。

上の議論に続いて，マルクスは，過剰生産がどのような事情によって一般的過剰生産として現出するかという問題を議論している。まず，「恐慌（したがってまた過剰生産）が一般的であるためには，それが主要な商品を襲えば足りる」[33]という命題を提示し，それを次のように説明する。

「キャラコで供給過剰になっている市場の停滞は，織物業者の再生産を撹乱する。この撹乱はまず第1に彼の労働者たちに影響を及ぼす。こうして，この労働者たちが，織物業者の商品――綿織物――および自分たちの消費にはいっていた他の諸商品の消費者であるということは，よりわずかな程度にすぎなくなるか，または，もはやまったくなくなってしまう」[34]。「多数の他

31）ＭＥＧＡⅡ-3-3，Ｓ.1154－1155：草稿集⑥748－749頁。
32）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.540：MEW，Bd.25，S.501：『資本論』(7)，297頁。
ここでの叙述は，草稿での表現よりは，エンゲルス版での表現の方が理解が容易であるように感じるが，それは，筆者の浅学のゆえであろうか。
33）ＭＥＧＡⅡ-3-3，Ｓ.1127：草稿集⑥709頁。
34）ＭＥＧＡⅡ-3-3，Ｓ.1144：草稿集⑥732頁。

の生産者たちも，綿織物の再生産における停滞によって影響をうける。…キャラコが市場に多すぎるために，キャラコや他の消費財を買うための彼らの手段が，制限され，収縮させられるのである。これは，また，他の商品（消費財）にも影響を及ぼす。いまやそれらの商品は，それらを買う手段が収縮させられ，これによってそれらにたいする需要が収縮させられるために，突如として相対的に過剰に生産されていることになる。たとえこれらの部面では過剰に生産されていなかったとしても，いまやそれらは過剰生産なのである」[35]。

この「主要商品の過剰生産の一般的過剰生産への転化」問題は，さらに，別の箇所（草稿721－726ページ）でも次のように説明されている。

「〔一般的過剰生産という〕この表現は，つねに，いくぶん割引して受け取られなければならない。というのは，一般的過剰生産の時機には，若干の部門における過剰生産は，つねに，ただ，主要な諸商品における過剰生産の結果であり帰結であるにすぎないからであり，つねにただ，相対的にすぎず，過剰生産が他の諸部面に存在するために生ずる過剰生産にすぎないからである。」[36]。「資本主義的生産は，…もしそれがすべての部面で同時にかつ均衡的に発展しなければならないとすれば，そもそも資本主義的生産はありえないであろう。これらの部面で過剰生産が絶対的に生ずるからこそ，過剰に生産されていない諸部面でもまた相対的に過剰生産が生ずるのである」[37]。

これらによって，マルクスが主張していることはこうである。すなわち，一方の側・「能動的な過剰生産が現れるところの主導的諸商品」[38]に過剰生産が発生するのは，けっして，他方の側・「受動的な過剰生産が現われる商品」[39]・「非主要商品」[40]に過少生産が存在していたからではない；主導的諸商

35) ＭＥＧＡⅡ－3－3，Ｓ．1144：草稿集⑥733頁。
36) ＭＥＧＡⅡ－3－3，Ｓ．1150：草稿集⑥741頁。
37) ＭＥＧＡⅡ－3－3，Ｓ．1152：草稿集⑥744頁。
38) ＭＥＧＡⅡ－3－3，Ｓ．1150：草稿集⑥741頁。
39) ＭＥＧＡⅡ－3－3，Ｓ．1150：草稿集⑥742頁。
40) ＭＥＧＡⅡ－3－3，Ｓ．1151：草稿集⑥743頁。

品に過剰生産が現出する時には実はすでに過剰生産が「あらゆる生産部面」に潜在的に存在しているということである。

ところで，このようなマルクスの議論には論理的限界がある。マルクス自身言うように（草稿719ページ）[41]，若干の主要な商品に過剰生産が発生すれば，それが，どのようにして他の諸商品に波及し，一般的過剰生産として現出するのかということは容易に理解しうるにしても，肝腎の最初の衝撃（主要な商品における過剰生産）が，そもそもどのようにして，なにゆえに発生するのかということは，それによってはいっこうに解明することができていないのである。彼が「過剰生産」問題に関して明らかにしえたことは，ただ，生産者大衆の消費制限とそれを顧慮しない生産の拡大との矛盾が過剰生産の究極の根拠であるということと，主要な商品における過剰生産がどのような波及過程をへて一般的過剰生産に転化するのかということだけである。どのようにして・なにゆえに或る主要な商品において過剰生産が最初の衝撃として現出せざるをえなくなるのかという肝腎の問題は，少なくともこの「1861−63年草稿」ノートXⅢ段階では，マルクスはいっさい解明することができていないのである。

以上が「1861−63年草稿」ノートXⅢ段階におけるマルクスの過剰生産論（「商品の過剰生産」論）であるが，こうした議論を受けて展開されるのが，マルクスの「資本の過剰生産」・「資本の過多」論である。

マルクスの「資本の過剰生産」・「資本の過多」が論じられている中心的な箇所は，a）草稿706−708ページ部分[42]と，b）草稿721−726ページ部分[43]の後半すなわち草稿725−726ページ部分[44]である。

まず，箇所a）の前段では，恐慌を「資本の過多」から説明する「リカードの後継者たち」に次のような批評を加えている。「リカードウは，彼自身

41）ＭＥＧＡⅡ−3−3，Ｓ．1145：草稿集⑥734頁。
42）ＭＥＧＡⅡ−3−3，Ｓ．1119−1122：草稿集⑥698−701頁。
43）ＭＥＧＡⅡ−3−3，Ｓ．1148−1155：草稿集⑥739−749頁。
44）ＭＥＧＡⅡ−3−3，Ｓ．1153−1155：草稿集⑥747−749頁。

がわかっているかぎりでは，つねに首尾一貫している。したがって，彼の場合には，過剰生産（商品の）はありえないという命題は，資本の過多または過剰（plethora oder superabundance of capital）はありえないという命題と同じものである。」[45]。

見られるように，ここでは，マルクスは，「資本の過多（plethora of capital)」と「資本の過剰（superabundance of capital)」とを概念的に区別せず，同一視している。「plethora oder superabundance of capital」という表現は，そのことを端的に表わしている。

マルクスにおける「資本の過剰生産」と「資本の過多」との同一視は，次のような叙述においても確認することができる。すなわち，「そうだとすれば，リカードウは，自分の後継者たちが，一方の形態での過剰生産[Ueberproduction]（市場における商品の一般的供給過剰としてのそれ）を否定しながら，資本の過剰生産，資本の過多，資本の過剰（surproduction of capital, Plethora of capital, superabundance of capital）としての，他方の形態でのそれを認めるというだけでなく，それを自分たちの学説の本質的な点にしているという愚かさにたいして，なにか言うべき言葉があったであろうか？／リカードウ後の時期のまともな経済学者で，資本の過多を否定している者は一人もいない。それどころか，彼らはすべて恐慌をこのことから説いている…。したがって，彼らはすべて，一方の形態での過剰生産を認めながら他方の形態でのそれを否定するのである。したがって，残る問題は，ただ，過剰生産のこの二つの形態は相互にどんな関係にあるのか，過剰生産が否定される形態は過剰生産が確認される形態にたいしてどんな関係があるのか？ということだけである。」[46]。

見られるように，ここでも，「資本の過剰生産」・「資本の過多」・「資本の過剰」は，マルクスにおいて，同じ規定内容をもつ概念として等置されてい

45) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1119：草稿集⑥698頁。
46) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1120：草稿集⑥699頁。

るが，しかし，それらは，「過剰生産[Ueberproduction]（市場における商品の一般的供給過剰としてのそれ)」と区別されるべきものとされている。すなわち，「彼ら[リカードウの後継者たち]は，…資本の過多と過剰生産（*plethora of capital und overproduction*）という，まことに結構な区別を考え出したのである。過剰生産にたいしては，彼らは…反対しながら，一方，資本の過多から…諸現象を演繹しようとする。たとえばウィルソンは，二，三の恐慌を固定資本の過多から説明し，他の恐慌を流動資本の過多から説明している。資本の過多そのものは，最もすぐれた経済学者たち（たとえばフラートン）によって主張され，すでに，この言葉が大学者ロッシャー先生の概論のなかでさえ自明なものとして再現しているほどの不動の先入観になっている。」[47]，と言う。

ここでは，マルクスは，リカードの後継者たちが，「資本の過多と過剰生産という…区別を考え出し」，一方では「資本の過多」（恐らく「資本の過剰生産」と等置されている）を認めながら，他方では，「過剰生産」を認めないことを批判している。しかし，この批判は，マルクス自身に次の問題を突きつけることになる。すなわち，「したがって，問題になるのは，資本の過多とはなにか，また，このことと過剰生産とはなににによって区別されるのか？ということである。…同じ経済学者たちによれば，資本は貨幣または商品と同じなのである。だから，資本の過剰生産は貨幣または商品の過剰生産と同じである。それにもかかわらず，この二つの現象には相互に共通するものはなにもない，と言うのである。それどころか，彼らの場合には貨幣は商品なのだから，貨幣の過剰生産すらないことになり，したがって，この現象全体は，商品の過剰生産に帰着するのであって，これを彼らは一方の名称のもとでは認めながら，他方の名称のもとでは否定しているのである。…／要するに，商品の過剰生産ではなくその代わりである資本の過多というこのきまり文句が単に逃げ口上にすぎないというのではないかぎり…「商品の過剰生

47）ＭＥＧＡⅡ-3-3，Ｓ．1121：草稿集⑥700頁。

産」という文句から「資本の過多」という文句への移行のなかには――事実上一つの進歩がある。それはどの点にあるのか？それは，生産者たちが，単なる商品所持者としてではなく，資本家として互いに相対している，という点である。」[48]。

見られるように，ここでは，マルクスは，一方で，「資本の過剰生産」と「[貨幣または商品の]過剰生産」とは「同じである」にもかかわらず，経済学者たちが「この二つの現象には相互に共通するものはなにもない，と言う」のは「詭弁」であると批判しつつも，他方で，「「商品の過剰生産」という文句から「資本の過多」という文句への移行のなかには――事実上一つの進歩がある」と言う。マルクスは,「リカードの後継者たち」が，恐慌現象を説明するために,「資本の過多」という概念を持ち出してきたことには，「事実上１つの進歩」があると評価しているのであるが，その場合，彼が注目し評価しているのは，「資本の過多」という概念を持ち出すことにとって，彼らが，過剰生産の場合に問題になるのは，生産物が商品として規定されるという単純な関係ではなく，生産物が商品以上のなにか（資本）になるところの生産物の社会的な諸規定であるということを事実上認めているという点である。したがって，このことが認められていさえすれば,「商品の過剰生産」という文句であれ，「資本の過剰生産」という文句であれ，マルクスにとっては，同じ現象(恐慌）の２つの「形態（名称)」を意味するにすぎないというわけである。

しかし，このような議論の仕方から分かるように，ここではマルクスは，少なくとも，「資本の過剰生産」と「商品の過剰生産」とは，それぞれ独自な規定内容をもつ概念である，という捉え方をしていないということが分かる。「資本の過剰生産」とはどのような独自な規定内容をもつ概念であるかという問題をそもそも積極的に考察していないのである。この段階では，マルクスは，「資本の過剰生産」とはなにかという問題を提起しながら，その問

48) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S. 1121：草稿集⑥ 700－701 頁。

題に意味のある・内実のある答えを得ようとはしておらず,「この現象全体は，商品の過剰生産に帰着する」という程度の認識にとどまっているし，また，そもそも「商品の過剰生産」概念についても十分な考察をしていないと言うことができる。

マルクスは,「リカードの後継者たち」が恐慌現象を説明するために持ち出してきた「資本の過多」という概念を検討し，この概念に対する自己の立場を固めておく必要があると考え，次のような問題提起をする。「したがって，残る問題が，ただ，過剰生産のこの2つの形態は相互にどんな関係にあるのか，過剰生産が否定される形態は過剰生産が確認される形態にたいしてどんな関係があるのか？ということだけである」[49]。「したがって，問題になるのは，資本の過多とはなにか，また，このことと過剰生産とはなにによって区別されるのか？ということである」[50]。

この問題提起を受けて，マルクスは,「商品の過剰生産」と「資本の過剰生産」とは相互にどんな関係があるのか，両概念はなにによって区別されるのかという問題を議論する。「リカードの後継者たち」は,「商品の過剰生産」と「資本の過剰生産」との間には「相互に共通するものはなにもない，と言う」が，しかし,「同じ経済学者たちによれば，資本は貨幣または商品と同じなのである。だから資本の過剰生産は貨幣または商品の過剰生産と同じである。…それどころか，彼らの場合には貨幣は商品なのだから，貨幣の過剰生産すらないことになり，したがって，この現象全体は，商品の過剰生産に帰着する」[51]。

注目すべきは，ここでのマルクスの批判は,「リカードの後継者たち」の見解の自己矛盾を突く形で行なわれているため，マルクス自身の考えが積極的な形で示されていないということである。彼がここで結局主張していることは,「資本の過剰生産」という「現象全体は，商品の過剰生産に帰着する」

49) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1120：草稿集⑥699頁。
50) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1121：草稿集⑥700頁。
51) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1121：草稿集⑥700頁。

ということだけである。だが，それは,「資本の過剰生産」概念に対するマルクスの考え方の一面にすぎないはずである。というのは，マルクスは,「リカードの後継者たち」が「資本の過剰生産」という概念を恐慌現象の説明のために持ち出してきたことになんの意味もないと考えているわけではないからである。マルクスは次のように述べている。すなわち，固定資本が過剰に生産されているとか，あるいは，流動資本が過剰に生産された，などと言うことによって,「リカードの後継者たち」は，恐慌現象を「資本の過多」から説明しようとしているが，その場合,「商品はもはや単に商品という単純な規定においてではなく，…資本としてのその規定において考えられている…。…過剰生産――の場合に問題になるのは，生産物が商品として現われ商品として規定されるところの単純な関係ではなく，生産物がそれによって商品以上の，しかも商品とは違ったなにかになるところの，生産物の社会的な諸規定である，ということ」が暗黙のうちに認められている。だから,「商品の過剰生産ではなくそのかわりである資本の過多というきまり文句が単に逃げ口上にすぎないのではないかぎり，…『商品の過剰生産』という文句から『資本の過多』という文句への移行のなかには――事実上1つの進歩がある。それはどの点にあるのであろうか？それは，生産者たちが，単なる商品所持者としてではなく，資本家として互いに相対している，という点である」[52]。

これによってわかるように，また既に指摘してきたように,「1861-63年草稿」XⅢ・706－708ページ段階では，マルクスは，少なくとも,「資本の過剰生産」と「商品の過剰生産」とは，それぞれ独自な規定内容をもつ概念である，という捉え方をしていない。また,「資本の過剰生産」とはどのような独自な規定内容をもつ概念であるかという問題も積極的に考察していない。この段階では，マルクスは,「資本の過剰生産」とは何かという問題を提起しながらその問題に積極的に答えようとはしておらず,「この現象全体は，商品の過剰生産に帰着する」ということを確認するにとどまっているの

52) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1121－1122：草稿集⑥701頁。

である。

それに対して，「1861-63年草稿」XⅢ 721－726ページ部分の後半では，マルクスは，「資本の過剰生産」概念に独自な規定を与えよう試みている。「資本の過剰生産とはなんのことか？剰余価値を生みだすように定められている価値量の過剰生産（Ueberproduction der Werthmassen）…したがって過大な規模での再生産（*Reproduction auf zu grosser Stufenleiter*）のことであり，これは過剰生産それ自体と同じものである。より詳しく規定すれば，これは次のことにほかならない。すなわち，あまりに多くのものが致富の目的のために生産されるということ，または生産物のうちの過大な部分（ein zu grosser Theil des Products）が，収入として消費されることにではなくより多くの貨幣を得ることに…あてられるということである」[53]。「多すぎる資本が存在するという文句は，実は，収入として消費されるものが少なすぎるということ，また，適切な条件のもとで消費されうるものが少なすぎるということにほかならないのである」[54]。

ここでは，マルクスは，「資本の過剰生産」とは，「剰余価値を生みだすように定められている価値量の過剰生産（Ueberproduction der Werthmassen）」，「過大な規模での再生産（*Reproduction auf zu grosser Stufenleiter*）」，「あまりに多くのものが致富の目的のために生産されるということ」，「生産物のうちの過大な部分（ein zu grosser Theil des Products）が，収入として消費されることにではなくより多く貨幣を得ることに…あてられるということ」であると規定している。マルクスはいろいろと言葉をかえ表現をかえて説明しているが，しかし，これらの規定は明らかに同義反復的な規定であると断言せざるを得ない。マルクスの説明は，＜「資本の過剰生産」とは「資本の過剰生産」のことである；「資本の過剰生産」とは「資本の過剰蓄積」のことである＞と言い放っているに等しいような規定であると言わざるを得ない。「資

53）ＭＥＧＡⅡ-3-3，Ｓ．1153－1154：草稿集⑥747頁。
54）ＭＥＧＡⅡ-3-3，Ｓ．1154：草稿集⑥747－748頁。

本の過剰生産」について本当に実のある・意味のある規定を得るためには，マルクスは，上掲の引用文に見られる「過剰」とか，「過大な」とか，「あまりに多くの」とかいった文言の意味・内容を――つまり「過剰」「過大」の意味内容を――理論的に明確に規定しなければならない。しかし，この段階でのマルクスは，まだ，そのようなことを理論的に明快に答えることができない。この残された課題は，筆者の見るところ，『資本論』第3部原稿に至ってはじめてその一部が果たされることになるのである。

Ⅳ.『資本論』第3部草稿第3章における「資本の過多」概念

『資本論』第3部草稿における「資本の過剰生産」・「資本の過多」に関する論述は，エンゲルス編集『資本論』第3部第3篇第15章第3節冒頭に相当する草稿箇所に初出する。

「利潤率の低下…につれて，…資本の最小限…は増大する。…それと同時に集積も増大する。…この増大する集積は，それ自身また，ある高さに達すれば，利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって，分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機，信用思惑，株式思惑，恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多（Die s.g. Plethora des Capitals）は，つねに根本的には，利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本――そして新たに形成される資本の若枝はつねにこれである――の過多（Plethora von Capital）に，または，このようなそれ自身で独自に行動する能力のない資本を大きな事業部門の指導者たちに（信用の形で）用だてる過多に，関連している。このような資本過多は，相対的過剰人口を刺激するのと同じ事情から生じるもの…である。といっても，…一方には遊休資本が立ち，他方には遊休労働者人口が立つのであるが。」[55]。

ここでのマルクスの論述は，「1861-63年草稿」ノートXⅥ 1005ページ[56]

55) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S.324-325：MEW, Bd.25, S.261：『資本論』(6), 409-410頁)。
56) ＭＥＧＡⅡ-3-3, S.1640：草稿集⑧1588頁。

のそれと殆ど同じ内容である。初出の「1861-63年草稿」ノートXⅥ1005ページの時と同様に，ここでも，「資本の過多Plethora des Capitals, Plethora von Capital」という文言が突然登場するが，やはりこの時点でも，それらの言葉の意味内容が理論的に説明されていない。「資本の過剰」・「資本の過多」とは何なのか，それは「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本…の過多（Plethora von Capital）に…関連している」とマルクスは注釈するだけである。

この叙述を皮切りに，マルクスは，「資本の過剰生産」・「資本の過多」の概念規定を本格的に始める。

「個々の商品の過剰生産ではなく資本の過剰生産（＝資本の過多）（といっても資本の過剰生産はつねに商品の過剰生産を含んでいるのだが）の意味するものは，資本の過剰蓄積以外のなにものでもないのである。この過剰生産がなんであるかを理解するためには〔それについてのもっと詳しい研究は，利子資本等々，信用等々がさらに展開される資本の現象的運動の考察に属する〕，それを絶対的なものと仮定してみさえすればよい。どんな場合に資本の過剰生産は絶対的なのだろうか？しかも，あれこれの生産領域とか二つ三つの重要な生産領域とかに及ぶのではなくその範囲そのものにおいて絶対的であるような，したがってすべての生産領域を包括するような，過剰生産は？／資本主義的生産を目的とする追加資本がゼロになれば，そこには資本の絶対的過剰生産があるわけであろう。しかし，資本主義的生産の目的は資本の価値増殖である。すなわち，剰余価値，利潤の生産であり，剰余労働の取得である。だから，労働者人口に比べて増大した資本が増大しすぎて，この人口が供給する絶対的労働時間も延長できないし相対的剰余時間も拡張できないようになれば…，つまり増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより少ない剰余価値――われわれはここで言っているのは，利潤の絶対的な量についてであって，利潤の率についてではない――しか生産しなくなれば，そこには資本の絶対的過剰生産が生じるわけであろう。すなわち，もとのC＋ΔCがP（もしこれがCによって生産された利潤の総計と

すれば）だけか，または，P－xしか生産しないであろう。どちらの場合にも一般的利潤率のひどい突然の低下が起きるであろうが，今度は，この低下をひき起こす資本構成の変動は，生産力の発展によるものではなく，可変資本の貨幣価値の増大と，これに対応する可変資本に対象化されている労働にたいする剰余労働の割合の減少とによるものであろう」[57]。

「ここで設けた極端な前提のもとでさえ，資本の絶対的過剰生産は，けっして絶対的な過剰生産ではなく，けっして生産手段の絶対的な過剰生産ではないのである。それが生産手段の過剰生産であるとはいって，ただ，生産手段が資本として機能しなければならず，したがってまた生産手段がその量の膨張につれて膨張した価値に比例してこの価値の追加的な増殖を含んでいなければならず，生みださなければならないような生産手段の過剰生産であるにすぎない。／それは過剰生産であろう。なぜならば，資本は，資本主義的生産過程の『健全な』，『正常な』発展が必要とするような搾取度，すなわち少なくとも充用資本量の増大につれて利潤量を増加させるような搾取度で，したがって資本の増大に比例する利潤率の低下（C＋ΔC－P＋0）または資本の増大よりも急速でさえある利潤率の低下（C＋ΔC）－P－x）を排除するような搾取度で，労働を搾取することはできないからである」[58]。

以上見られるように，「資本の過剰生産（＝資本の過多）」とは「資本の過剰蓄積」であり，それを理解するためには，「それを絶対的なものと仮定してみさえすればよい」として，「資本の絶対的過剰生産」についての説明が行われる。その要点はこうである。「その範囲そのものにおいて絶対的であるような，したがってすべての生産領域を包括するような，過剰生産」，「資本主義的生産を目的とする追加資本がゼロになれば，そこには資本の絶対的過剰生産がある」，「労働者人口に比べて増大した資本が増大しすぎて，この人口が供給する絶対的労働時間も延長できないし相対的剰余時間も拡張でき

57）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 325-326；MEW，Bd. 25，S. 261－262：『資本論』(6)，410－411頁。
58）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 329；MEW，Bd. 25，S. 265：『資本論』(6)，417頁。

ないようになれば…，つまり増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより少ない剰余価値…しか生産しなくなれば，そこには資本の絶対的過剰生産が生じる」。

これが，『資本論』におけるマルクスの，「資本の絶対的過剰生産」に対する最初の概念規定であるが，筆者は，旧稿において，上掲の幾つかの引用文を踏まえて，「資本の絶対的過剰生産」概念を大凡次のようなものであるとした。すなわち，《第1に，「資本の絶対的過剰生産」は，「すべての生産領域を包括するような過剰生産」である。第2に，「資本の絶対的過剰生産」は，「資本主義的生産を目的とする追加資本がゼロ」になるような事態である。第3に，「資本の絶対的過剰生産」は，資本蓄積に比べて労働者人口が不足することによって生じる。第4に，「資本の絶対的過剰生産」は，「増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより少ない剰余価値…しか生産しなくなれば」発生する。この場合，一般的利潤率の低下に伴って社会全体の利潤量が減少する。第5に，「資本の絶対的過剰生産」をひき起こす一般的利潤率の低下は，生産力の発展→資本の有機的構成の高度化に伴う一般的利潤率の傾向的低下ではなくて，賃金騰貴による「ひどい突然の低下」である。》[59]。

「資本の絶対的過剰生産」については，これまで多くの論者がこの概念を現行版『資本論』第3部第3篇第15章第3節の唯一の「主題」であるかのように取扱ってきたが，筆者は，「資本の絶対的過剰生産」を同節の唯一の「主題」であるとは考えない。確かに，マルクスは同節の多くの紙幅を費やして「資本の絶対的過剰生産」を説明しているが，しかし，それは，「資本の絶対的過剰生産」が同節の唯一の主題であることを意味しないと考える。それは，「極端な前提」のもとにこの概念を説明することによって，対比的に，それとは異なる概念内容をもった「資本の過剰生産」=「現実の資本の過

59) 拙稿「マルクスの『資本の過剰生産』論――再論：『資本論』第3部「主要草稿」を踏まえて――」『経済経営論集』（桃山学院大学）第36巻第2号，1994年12月，17－19頁の要約。

剰生産」を『資本論』の論理次元が許す範囲内で明らかにしようとしたものでもあると考える。この筆者の解釈[60]は，『資本論』第3部草稿に見られる「現実の資本の過剰生産は，ここで考察されたものとけっして同じものではなく，それと比べてみれば，相対的なものにすぎない。(Die wirkliche Ueberproduction von Capital nun ist nie identisch mit der hier betrachteten, sondern ist gegen sie betrachtet nur eine relative.)」[61]という叙述（この部分は，不思議なことに，エンゲルス編集『資本論』では完全に削除されている）に，その根拠を求めることができよう。

ともあれ，この「資本の絶対的過剰生産」規定は，「1861−63年草稿」ノートXⅢ段階における「資本の過剰生産」・「資本の過多」規定に比べれば，その内容が遙かに理論的に明確化されたものであると言えよう。ところが，このあと，マルクスは，さらに，それと対比的な「現実の資本の過剰生産」概念についての説明に移っていく。

「資本の過剰生産は，資本として機能できる，すなわち与えられた搾取度での労働の搾取に充用される生産手段——労働手段および生活手段——の過剰生産以外のなにものでもない。与えられた搾取度でというのは，この搾取度の一定の点以下への低下が，資本主義的生産過程の撹乱と停滞，恐慌と資本の破壊をひき起こすからである。このような資本の過剰生産が多少とも大きな相対的過剰人口を伴うということは，けっして矛盾ではない。（この相対的過剰人口の減少は，それ自身すでに恐慌の一契機である。というのは，それは，うえで（eben——佐藤「アムステルダム・ノート」ではobenと解読されている）考察された資本の絶対的過剰生産の場合に近づくからである。）労働の生産力を高くし，生産物（商品）の量を増やし，市場を拡大し，資本の蓄積（それの素材の大きさから見ても価値の大きさから見ても）促進し，利潤率を低下させた事情，その同じ事情が相対的過剰人口を生みだ

60）同上稿。
61）ＭＥＧＡⅡ−4−2，S. 329.

したのであり，また絶えず生みだしているのであって，それが過剰資本（*Surpluscapital*）によって充用されないのは，それが労働の低い搾取度でしか充用できないからであり，または少なくとも，与えられた搾取度のもとでそれが充用されるであろう利潤率が低いからである」[62]。

これらによって分かるように，『資本論』第3部草稿第3章（のエンゲルス編集『資本論』第3部第3篇第15章第3節の後半部分に相当する箇所）における「資本の絶対的過剰生産」概念の説明に続けて，マルクスは，「現実の資本の過剰生産」についても明確な概念規定を与えようとしているのである。筆者は旧稿において，マルクスが上記の「資本の絶対的過剰生産」概念と対比させつつ説明しようとしている「現実の資本の過剰生産」概念について，次のような規定内容をもつ概念であると考えた。

《第1に，「現実の資本の過剰生産」とは，「すべての生産領域を包括するような過剰生産」ではなくて，その範囲そのものにおいて「相対的」であるような「資本の過剰生産」である。第2に，「現実の資本の過剰生産」は，人口過剰のもとで・人口過剰を伴って生じる。第3に，「現実の資本の過剰生産」は「資本の過剰が相対的過剰人口の増大と結びついている」状況のもとで発生するのであるが，この場合利潤率の低下は，究極的には，相対的過剰人口を生みだしたのと同じ事情（労働の生産力の発展→資本の有機的構成の高度化）に起因している。第4に，「現実の資本の過剰生産」の場合，「すべての生産領域」において追加資本がストップする訳ではない。第5に，「現実の資本の過剰生産」とは，利潤率が低下するが利潤量は増大し，全体として後者が前者を「埋め合わせる」ことができる状態である。マルクスは，「現実の資本の過剰生産」とは，「与えられた搾取度」や「特定の利潤率」で充用するには多すぎる生産手段が生産されることであるということを力説している。第6に，「現実の資本の過剰生産」は「周期的に」発生する。》[63]。

62）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.330：MEW，Bd.25，S.266：『資本論』(6)，417-418頁。
63）拙稿「マルクスの『資本の過剰生産』論――再論：『資本論』第3部「主要草稿」を踏まえて――」，22－29頁。

以上,「資本の絶対的過剰生産」と「現実の資本の過剰生産」について両概念の内容を対比的に見てきたが，残された問題はその両概念の関係である。マルクスは，両概念の関係については対比的に（「絶対的」か「相対的」かという対比）にしか述べていない，つまり両概念の関係を明示的には述べていない。しかし，マルクスの幾つかの論述から彼の意をくみ取って，両概念の関係を考えなければならない。

マルクスは,「いわゆる資本の過多は，つねに根本的には，利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本――そして新たに形成される資本の若枝はつねにこれである――の過多…に，関連している。」[64]と述べているが，これから分かるように,「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本」が「過剰資本」である。これを踏まえて,「資本の絶対的過剰生産」は何かと問えば，それは，社会的総資本が全体として「利潤率の低下が利潤の量によって償われない」状態にあることである。言い換えれば,「利潤率の低下が利潤の量によって償われない」資本が社会的総資本の多数を占めるという状態である。これに対して,「現実の資本の過剰生産」とは何かと問えば，それは，社会全体としては「増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより多くの剰余価値」を生産することが可能な状態であり,「利潤率の低下が利潤の量によって償われない」資本が社会的総資本の多数を占めることがない状態である。このような状態の場合，利潤率が低下するが利潤量は増大し，全体として後者が前者を「埋め合わせる」ことが出来る状態にある。

上記の説明をもう少し敷衍すればこうなる。すなわち,「利潤量によって利潤率の低下を埋め合わせる」ことができるのは,「社会の総資本」と「確立した大資本」･「小数の既成の大資本」だけであり,「新たに形成される資本の若枝」や「新たな独立して機能する追加資本」はこの「埋め合わせ」は保障されていない。「現実の資本の過剰生産」の場合には，一方では,「埋め合

64）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 325：MEW，Bd. 25，S. 261：『資本論』(6)，410頁。

わせ」が可能な「確立した大資本」・「小数の既成の大資本」が存在し，そこでは追加資本投資・資本蓄積が行なわれるが，他方では，そうした「埋め合わせ」が保障されていない「新たな独立して機能する・新たに形成される資本の若枝」が存在し，追加資本投資・資本蓄積がストップしている。この時，社会全体としては「増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより多くの剰余価値」を生産する状態にある。事態が進行して社会の総資本の「小数の既成の大資本」のもとだけで資本形成が行なわれるようになる。その時，社会全体の総資本について全体として「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本」すなわち「過剰資本」が多数を占めるようになり，社会全体として「増大した資本が，増大する前の資本と同じかまたはそれより少ない剰余価値…しか生産」できないような状態になる。つまり「資本の絶対的過剰生産」の状態になる。

以上両概念を通して言えることは，マルクスにとって，「資本の過剰生産は，…与えられた搾取度での労働の搾取に充用される生産手段——労働手段および生活手段——の過剰生産」のことである；この「与えられた搾取度」の「一定の点以下への低下が，資本主義的生産過程の攪乱と停滞，恐慌と資本の破壊をひき起こす」のである；「過剰資本」が発生するとすれば，それは「労働の低い搾取度でしか充用できないからであり，…与えられた搾取度のもとでそれが充用されるであろう利潤率が低いからである」ということである。

要するに，ここでマルクスは，資本が労働者を「与えられた搾取度」で充用できるかどうか，これが「資本の過剰生産」=「資本の過多」であるかどうかの基準であるという明確な規定を与えているのである。こうして，マルクスは，「資本の過剰生産」概念について，「1861-63年草稿」ノートXⅥおよびノートXⅢにおける「資本の過剰生産」概念の規定内容と対比すると，かなり理論的に明確な内容をもつことになったのである。

このような『資本論』第3部草稿第3章における「資本の過剰生産」概念の規定は，『資本論』第1部第7篇の資本蓄積論における「相対的過剰人口」

の概念規定に相通じるものであるように思われる。というのは，『資本論』第1部第7篇（初版第6章）において，マルクスは，「相対的過剰人口」概念を次のように規定しているからである。「相対的な，すなわち資本の平均的な増殖欲求にとってよけいな，したがって過剰な，または追加的な労働者人口（*relative, d.h. für die mittleren Verwerthungsbedürfnisse des Kapitals überschüssige,* daher *überflüssige* oder *Surplus-Arbeiterbevöikerung*）」[65]・「相対的な，すなわち資本の平均的な増殖欲求にとっての，過剰人口（einer relativen, d.h. für das mittlere Verwerthungsbedürfniß des Kapitals Surpluspopulation）」[66]・「この過剰人口は，資本家のその時々の搾取欲求と比べて（par rapport aux besoins momentanés de l'expolitation capitaliste）のみ存在する」[67]。

これらは，要するに，「資本の平均的な増殖欲求」・「資本家のその時々の搾取欲求」を満たすことができない労働者人口が「相対的過剰人口」であるという規定である。この規定を「資本の過剰」に当てはめてみると次のようになろう。すなわち，「資本の平均的な増殖欲求」・「資本家のその時々の搾取欲求」を満たすことができないとすれば，それは「資本の過剰生産」である，と。

「資本の過剰生産」に対してこのような明確な概念規定を与えるようになったにもかかわらず，『資本論』第3部（エンゲルス編集『資本論』第3

65) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie, Erster Band, 1867*. in : *Karl Marx／Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt.Ⅱ, Bd.5, Dietz Verlag, 1983, S.507. 以下，この書をＭＥＧＡⅡ-5と略記する。引用に際しては，引用箇所を，引用ページとそれに対応するMEW『資本論』(Karl Marx, *Das Kapital, Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd.23, Dietz Verlag, Berlin, 1964) およびその邦訳（岡崎次郎訳『資本論』大月書店，国民文庫版(1), (2), (3), 1972）の引用ページを，次のように略記して示す。ＭＥＧＡⅡ-5, S. 507：MEW, Bd. 23, S. 658：『資本論』(3), 216頁。

66) ＭＥＧＡⅡ-5, S. 510：MEW, Bd. 23, S. 662：『資本論』(3), 221頁。

67) Karl Marx, *Le Capital*, Traduction de M. J.Roy, entièrement revisée par l, auteur, Paris, Éditeurs Maurice Lachatre et Cie, 1872-75, p. 278. (Karl Marx, *Le Capital*, Paris, 1872-1875 in : *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt.Ⅱ, Bd.7, Dietz Verlag, 1989, p.554. この著書の参照・引用は，オリジナル本の完全復刻版である『資本論（フランス語初版本）』極東書店，1967年によって行った。

篇第15章第3節に対応する箇所の）草稿段階でも，マルクスは，「資本の過剰生産」と「資本の過多」とを同一視し，両者を等置している。それを端的に現しているのが，マルクスの「個々の商品の過剰生産ではなく資本の過剰生産（＝資本の過多）Ueberproduction von Capital（= Plethora von Capital）…の意味するものは，資本の過剰蓄積以外のなにものでもないのである。…」[68]という等値表現である。マルクスによる「資本の過剰生産」と「資本の過多」の同一視は，既に見てきたように，「1861-63年草稿」以来一貫した捉え方・認識である。ところが，この認識は，『資本論』第3部草稿第5章において急変することになる。

V.『資本論』第3部草稿第5章における「資本の過多」概念

『資本論』第3部草稿では，その第3章草稿部分に引き続いて，第5章草稿部分に多数の「資本の過多Plethora of capital」という用語が出現する[69]。

「Ⅲ）いまやわれわれが近づいてゆく信用という事柄全体のなかでも比類なく困難な問題は，次のような問題である。――第1に，本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで，現実の資本蓄積の，すなわち拡大された規模での再生産の，指標であるのか，またどの程度までそうでないのか？いわゆる資本の過多（この表現は，つねに貨幣資本について用いられるものである）は，過剰生産と並ぶ一つの特殊的な現象であるのか，それとも，単に過剰生産を表現するための一つの特殊的な仕方にすぎないのか？貨幣資本の過剰供給は，どの程度まで，停滞しているもろもろの貨幣量（鋳貨，地金または銀行券）と同時に生じ，したがって貨幣の量の増大で表現されるのか？」[70]。

これまでマルクスは，「資本の過剰生産」＝「資本の過多」と捉えてきたが，

68）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.325：MEW，Bd.25，S.261：『資本論』(6)，410頁。
69）『資本論』第3部草稿第3章のあと，第4章中の1箇所に，「資本の過多plethora of capital」なる用語を含む叙述が出現するが，「資本の過多」概念の理解を大いに助けるものではないと判断した。ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.384：MEW，Bd.25，S.322-323：『資本論』(6)，506-507頁。
70）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.529：MEW，Bd.25，S.493：『資本論』(7)，284-411頁。

しかし，ここに至って，漸く，「資本の過多」と「過剰生産」とを明確に区別し，しかも両者をどのように区別するべきかという問題を提起している。しかも，注目すべきことに，「資本の過多」について，これまでとはまったく異なる概念規定を，——取り敢えず，と言っても良いのかも知れないが——与えている。すなわち，「いわゆる資本の過多」という「表現は，つねに貨幣資本について用いられるものである」と，はじめてこの用語の意味を明言している。このような言葉の使い方の表明は，『資本論』の準備諸草稿や『資本論』第3部第3章草稿部分には見られなかったものである。しかも，この注記以後，マルクスは，この言葉の注釈を踏まえて，「資本の過多」という用語を使用する際，「貨幣資本の過多Plethora von moneyed capital, Plethora of moneyed Capital」という表現を使うようになる。以下，幾つかの事例を見ておこう。

「ところで，利潤のもう一つの部分，すなわち収入として消費されるものとして予定されていない部分について言えば，それが貨幣資本に転化するのは，ただ，それを生みだした生産部面でそれが直接に事業の拡張に充用されない場合だけである。このようなことは二つの原因から生じうる。一つの原因は，この部面が必要な資本で飽和しているということである。もう一つの原因は，資本として機能できるようになるまえに，蓄積がまず，この特定の事業での新たな資本の充用の量的関係に規定された或る程度の大きさに達していなければならないということである。…もしこの新たな蓄積がそれの充用にさいして投下部面の不足という困難にぶつかる（したがって，その結果，充用中の再生産的資本が支払う利子が低下する）とすれば，このような貨幣資本の過多（*Plethora of moneyed Capital*）が証明するものは，資本主義的生産過程の諸制限以外のなにものでもない。そのあとにくる信用詐欺は，この剰余資本の充用にたいする積極的な障害がないということを証明している。とはいえ，資本の価値増殖の諸法則への障害，つまり資本が資本として価値増殖できる諸限界への障害はあるのである。貨幣資本そのものの過多（Plethora of moneyed Capital als solchem）は必ずしも過剰生産を，あ

るいは資本の充用場面の不足を表現してはいないのである。」[71]。

「貨幣資本の蓄積とは，ただたんに，貨幣が貸付可能な貨幣として沈殿する（あるいは貸付可能な貨幣という形態をとる）ことであって，この過程は，貨幣の資本への現実の転化とは非常に違うものである…こと，この蓄積は，すでに指摘したように，現実の蓄積とは非常に違った諸契機を表現していることがありうることを考えるならば，現実の蓄積がたえず拡張されている場合には，貨幣資本の蓄積の拡張は，一部は現実の蓄積の拡張の結果でもありうるし，一部は現実の蓄積の拡張に伴ってはいるがそれとはまったく違った諸契機の結果でもありうる。…現実の蓄積からは独立していながらしかもそれに随伴する諸契機によって，貨幣資本の蓄積が膨張させられる，という理由からだけでも，循環の一定の諸局面ではつねにこの貨幣資本の過多（Plethora dieses monied Capital）が生ぜざるをえないのであり，また，信用制度の発展につれて，この過多が発展せざるをえないのであり，したがって同時に，生産過程をそれの資本主義的諸制限を乗り越えて推進することの必然性が――過剰取引，過剰生産，過剰信用が――発展せざるをえないのである。しかし，このことは，つねに，はね返りを呼び起こすような諸形態で起こらざるをえないのである。」[72]。

このように，『資本論』第3部第5章の草稿段階になって，マルクスは，「資本の過多Plethora of Capital」から「貨幣資本の過多Plethora of moneyed Capital」へと用語を変更するだけではなく，「資本の過多」と「貨幣資本の過多」の違いを明確に意識・認識するようになった。例えば，「貨幣資本そのものの過多（Plethora of moneyed Capital als solchem）は必ずしも過剰生産を，あるいは資本の充用場面の不足を表現するものではない」ということを確認している。この用語の使い方の変更に伴って，マルクスは，「[現実]資本の過剰生産」を表現する用語を「Ueberproduction von Capital」

71）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.585－586：MEW，Bd.25，S.523：『資本論』(7)，335－336頁。
72）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.586：MEW，Bd.25，S.523－524：『資本論』(7)，336頁。

から「superabundance of [productive] capital」「superabundance von [productivem] Capital」へと変更し，後者を多用することになったようである。以下のような表現が次々と登場する。

「貸付可能な貨幣資本…の量が最大になるのは恐慌のあとであって，この時，再生産過程が縮小し，したがってまた再生産的資本の量が一部分減少し…，また固定資本の一部分は完全には充用されていない，等々のときである。…この場合には，だれも，資本の過剰（superabundance of capital）のゆえに利子が低い，と言うことはできない。ここにあるのは生産的資本の収縮であり，生産的資本にたいする貨幣形態にある資本の，一部は相対的な拡張であり，一部は絶対的な拡張である。」[73]。

「利子が再び最高限度に達するのは，再生産過程が麻痺して，前に述べたようないくつかの例外はあるにしても，遊休生産的資本の過剰（superabundance von *unbeschäftigtem productivem Capital*）が現われるようになるときである。」[74]。

「このように，全体として見れば，（利子率に表わされる）貨幣資本の運動は，生産的資本の運動とは反対の方向に進むのである。まだ低いとはいえ最低限度よりも高い利子率が恐慌後の『好転』および信頼の増大といっしょに現われる段階，また特に，利子率がその平均的な高さ，すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階，ただこの二つの時期だけが，豊富な貸付資本と生産的資本の大膨張とが同時に現われる場合を示している。しかし，産業循環の発端では低い利子率と生産的資本の収縮とが同時に現われ，循環の終わりには高い利子率と生産的資本の過剰（Superabundance von productivem Capital）とが同時に現われる。『好転』に伴う低い利子率は，商業信用がまだ自分の足で立っているのでわずかな度合いでしか貨幣信用を必要としないということを表わしている。」[75]。

73) ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 541。
74) ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 542：MEW，Bd. 25，S. 505：『資本論』(7)，305 頁。
75) ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 542：MEW，Bd. 25，S. 505-506：『資本論』(7)，305 頁。

「なお，生産的資本の過剰（superabundance of productive capital）については，次のことを述べなければならない。」[76]。

以上のように，生産的資本――エンゲルス編集『資本論』第3部では，「現実資本」を表現するために多くの場合，「産業資本industrielle Kapital」と表記されている――の「過剰」を表すために，マルクスは，これまで多用してきたUeberproduction von Capitalではなく，superabundance of (productive) capitalを使用するようになったようであるが，しかし，なお，貨幣資本の「過剰」を表すsuperabundance of monied capitalという用語も幾つか散見される。例えばこうである。

「しかし，ここでの問題は一般的に，どの程度まで貨幣資本の過剰（superabundance of moneyed Capital）が，――あるいは，もっと適切に言えば，どの程度まで貸付可能な貨幣資本の形態での資本の蓄積が現実の蓄積と同時に生じるのか，ということである。」[77]。

「生産的な蓄積とはただ相対的にしか関連しないような，すなわちそれと反比例しているような，貨幣資本の蓄積（過剰superabundance）が生じることがありうる。それは産業循環の2つの局面でのことである。すなわち，生産的資本が収縮している局面（恐慌のあとの循環の開始期），そして続いて，好転は始まってはいるがまだ商業信用が貨幣信用をほとんど強要していない局面である。第1の場合には，以前は活況の事業で充用されていた貨幣資本が遊休貨幣資本として現われ，第2の場合には，それが非常に低い利子率で充用されるものとして現われる。…貨幣資本の過剰（*Superabundance of monied capital*）は，第1の場合には生産的資本の停滞を表現しており，第2の場合には，商業信用が貨幣信用から相対的に独立していることを表現している。（これは，還流の流動性，短期の商業信用，そして自己資本による営業の優勢にもとづいている。他人の信用資本をあてにしている働き手たち

76）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.543：MEW，Bd.25，S.507：『資本論』(7)，308頁。
77）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.547：MEW，Bd.25，S.511：『資本論』(7)，314頁。

はまだ出動していないし，自己資本をもっている働き手たちはまだ，自分の操作をほぼ純粋な信用操作にまで広げることはしてはいない。）第1の場合には，貨幣資本の過剰（superabundance of monied capital）は現実の蓄積の表現とはまさに反対のものである。第2の場合には，それは再生産過程の再拡張と同時に生じ，これに随伴するものではあるが，これの原因ではない。貨幣資本の過剰はすでに減少し始めているが，それへの需要と比べての相対的なものでしかない。どちらの場合にも，この過剰によって現実の蓄積過程の拡張が促進される。なぜならば，第1の場合には低い価格と，第2の場合には回復しつつある価格と同時に生じている低い利子が，利潤のうちの企業利得に転化する部分を増大させるからである。」[78]。

「『エコノミスト』は次の文句のなかで，貨幣資本の過剰［*superabundance of moneyed capital*］（低利子率）を資本一般の過剰（*superabundance of capital überhaupt*）と同一視しようと努めている。」[79]。

以上のように，「貨幣資本の過剰」を表すためのように――つまりは，新たな資本過剰概念を表すために，Plethora of monied capitalという用語を使用するようになったとはいえ，なおsuperabundance of monied capitalという用語を併用するという状況が続いている。とはいえ，この時点（『資本論』第3部草稿第5章段階）において，マルクスは，少なくとも，「［貨幣］資本の過多」と「［生産的］資本の過剰［生産］」とを概念的に明確に区別するようになったことだけは確認することができる。

だが，マルクスがこのような用語の変更・区別を行ったとしても，両者の関係をどのように捉えることができるのかという問題が残されている。マルクス自身も，この問題の存在を自覚し，自らも問題提起している。以下，出来る限り『資本論』草稿の叙述に沿ってマルクスの考えを析出する作業を行うことにしよう。

78) MEGAⅡ-4-2, S. 547-548：MEW, Bd. 25, S. 511-512：『資本論』(7), 315頁。
79) MEGAⅡ-4-2, S. 635。

まず，『資本論』第3部の第5章草稿部分から上記問題に関連する論述をできるかぎり集めることである。

①「Ⅲ)いまやわれわれが近づいてゆく信用という事柄全体のなかでも比類なく困難な問題は，次のような問題である。――第1に，本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで，現実の資本蓄積の，すなわち拡大された規模での再生産の，指標であるのか，またどの程度までそうでないのか？いわゆる資本の過多（この表現は，つねに貨幣資本について用いられるものである)[Die s.g. *Plethora of capital* (ein Ausdruck, der immer von monied Capital gebraucht wird)]は，過剰生産と並ぶ一つの特殊的な現象であるのか，それとも，単に過剰生産を表現するための一つの特殊的な仕方にすぎないのか？貨幣資本の過剰供給は，どの程度まで，停滞しているもろもろの貨幣量（鋳貨，地金または銀行券)と同時に生じ，したがって貨幣の量の増大で表現されるのか？」[80]。

ここでマルクスが提起している問題は，まさに，本稿においてまさに検討しようとしている問題である。すなわち，「本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで，現実の資本蓄積の…指標なのか，またどの程度までそうでないのか？いわゆる資本の過多…，――これは過剰生産と並ぶ一つの特殊的な現象をなすものなのか，それとも過剰生産を表現するための一つの特殊的な仕方にすぎないのか？」。

マルクスは問題提起をしているが，しかし，ここではまだ解答を与えることができていない。「いわゆる資本の過多」と「過剰生産」とを区別をしているのであるが，その区別の内容，そして両者の関連を明らかにすることができていない。

②「貨幣資本の膨張は，…生産的資本のなんらかの増大を表現するものだと言うことはできない…。生産規模が同じままであるかぎり，それはただ，生産的資本に比べての貸付可能な貨幣資本の過剰（superabundance　des

80) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S. 529：MEW, Bd. 25, S. 493：『資本論』(7), 284－411頁。

loanable monied capital）を生じさせるだけである。」[81]。

最初に提起された問題に答えようとしているが，ここでもまだ，問題に有効な解答を与えることができずに，「貨幣資本の膨張」と「生産的資本の…増大」との間には何らかの直接的な因果関係が無いということを指摘しているだけである。両者の間に存在する関連性についての積極的な内容を規定することができていない。

③「このように，全体として見れば，（利子率に表わされる）貨幣資本の運動は，生産的資本の運動とは反対の方向に進むのである。まだ低いとはいえ最低限度よりも高い利子率が恐慌後の『好転』および信頼の増大といっしょに現われる段階，また特に，利子率がその平均的な高さ，すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階，ただこの二つの時期だけが，豊富な貸付資本と生産的資本の大膨張とが同時に現われる場合を示している。しかし，産業循環の発端では低い利子率と生産的資本の収縮とが同時に現われ，循環の終わりには高い利子率と生産的資本の過剰（Superabundance von productivem Capital）とが同時に現われる。」[82]。

ここでは，マルクスは，「貨幣資本の運動は，生産的資本の運動とは反対の方向に進む」；例えば「産業循環の発端では低い利子率と生産的資本の収縮とが同時に現われ，循環の終わりには高い利子率と生産的資本の過剰とが同時に現われる」ということを確認している。

④「しかし，ここでの問題は一般的に，どの程度まで貨幣資本の過剰（superabundance of moneyed Capital）が，――あるいは，もっと適切に言えば，どの程度まで貸付可能な貨幣資本の形態での資本の蓄積が現実の蓄積と同時に生じるのか，ということである。」[83]。

最初の問題提起[84]（ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 529；引用文①）を受けてマルク

81）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 541-542.
82）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 542：MEW，Bd. 25，S. 505-506：『資本論』(7)，305 頁。
83）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S. 547：MEW，Bd. 25，S. 511：『資本論』(7)，314 頁。
84）注 77 参照。

スは，「貨幣資本」の蓄積と「現実の蓄積」との関係について議論してきたにもかかわらず，ここでもまた，不憫なことに，同じ問題を提起している。すなわち，「ここでの問題は一般的に，どの程度まで貨幣資本の過剰が…現実の蓄積と同時に生じるのか，ということである」と。ここに至っても，この種の問題を提起しているということは，ここまでの議論によっては最初に提起された問題がまだ全然解明されていないということをマルクス自身が認めているということを意味する。つまり，マルクスは，この時点においてもまだ，自身が提起した問題に有効な解答を与えることができていないということである。

⑤「生産的な蓄積とは…反比例しているような，貨幣資本の蓄積（過剰superabundance)が生じることがありうる。それは産業循環の2つの局面でのことである。すなわち，生産的資本が収縮している局面(恐慌のあとの循環の開始期)，そして続いて，好転は始まってはいるがまだ商業信用が貨幣信用をほとんど強要していない局面である。第1の場合には，以前は活況の事業で充用されていた貨幣資本が遊休貨幣資本として現われ，第2の場合には，それが非常に低い利子率で充用されるものとして現われる。…貨幣資本の過剰（*Superabundance of monied capital*）は，第1の場合には生産的資本の停滞を表現しており，第2の場合には，商業信用が貨幣信用から相対的に独立していることを表現している。」[85]。

ここでもまた，マルクスは，引用文③（ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.542）の議論と同じように，「生産的な蓄積とは…反比例しているような，貨幣資本の蓄積（過剰)が生じることがありうる」；「生産的資本が収縮している局面(恐慌のあとの循環の初め)」では，「貨幣資本の過剰」は「生産的資本の停滞を表現」している場合があることを指摘している。すなわち，「生産的な蓄積」と「貨幣資本の蓄積（過剰)」との反比例関係，「貨幣資本の過剰」は「生産的資本の停滞を表現」していることを指摘している。

85）ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.547：MEW，Bd.25，S.511：『資本論』(7)，315頁。

⑥「ところで，利潤のもう一つの部分，すなわち収入として消費されるものとして予定されていない部分について言えば，それが貨幣資本に転化するのは，ただ，それを生みだした生産部面でそれが直接に事業の拡張に充用されない場合だけである。このようなことは二つの原因から生じうる。一つの原因は，この部面が必要な資本で飽和しているということである。もう一つの原因は，資本として機能できるようになるまえに，蓄積がまず，この特定の事業での新たな資本の充用の量的関係に規定された或る程度の大きさに達していなければならないということである。だから，蓄積はさしあたりまず貨幣資本に転化して，他の諸部面での生産の拡張に役立つのである。諸事情がすべて変わらないものと仮定すれば，資本への再転化するべき利潤の量は，得られる利潤の量によって，したがってまた，諸事情がすべて変わらないものと前提すれば，現実の再生産過程の拡張によって，左右されるであろう。しかし，もしこの新たな蓄積がそれの充用にさいして投下部面の不足という困難にぶつかる（したがって，その結果，充用中の再生産的資本が支払う利子が低下する）とすれば，このような貨幣資本の過多（*Plethora of moneyed Capital*）が証明するものは，資本主義的生産過程の諸制限以外のなにものでもない。そのあとにくる信用詐欺は，この剰余資本の充用にたいする積極的な障害がないということを証明している。とはいえ，資本の価値増殖の諸法則への障害，つまり資本が資本として価値増殖できる諸限界への障害はあるのである。貨幣資本そのものの過多（Plethora of moneyed Capital als solchem）は必ずしも過剰生産を，あるいは資本の充用場面の不足を表現してはいないのである。」[86]。

ここでは，マルクスは，2つのことを述べている。1)「貨幣資本の過多」は，資本の投下「部面が必要な資本で飽和状態にある」結果である；2) とはいえ，「貨幣資本の過多」は「必ずしも過剰生産を…表現するものではな

86) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S. 585－586：MEW, Bd. 25, S. 523：『資本論』(7), 335－336頁。

い」ということ。後者の主張は，先に見たマルクスの主張――「貨幣資本の膨張は，…生産的資本のなんらかの増大を表現するものだと言うことはできない」という主張――と同じものであると言うことができる。だが，このように「貨幣資本の過多」は「必ずしも過剰生産を…表現」している訳ではないというだけでは，「貨幣資本の過多」と「[生産的資本の]過剰生産」とが如何なる関連を有しているのか，殆ど何も明らかにならないと言わざるを得ない。

⑦「貨幣資本の蓄積の拡張は，一部は現実の蓄積の拡張の結果でもありうるし，一部は現実の蓄積の拡張に伴ってはいるがそれとはまったく違った諸契機の結果でもありうる。(対立は度外視する)。現実の蓄積からは独立していながらしかもそれに随伴する諸契機によって，貨幣資本の蓄積が膨張させられる，という理由からだけでも，循環の一定の諸局面ではつねにこの貨幣資本の過多（Plethora dieses monied Capital）が生ぜざるをえないのであり，また，信用制度の発展につれて，この過多が発展せざるをえないのであり，したがって同時に，生産過程をそれの資本主義的諸制限を乗り越えて推進することの必然性が――過剰取引，過剰生産，過剰信用が――発展せざるをえないのである。」[87]。

ここでは，マルクスは，「貨幣資本の蓄積の拡張」は，一部は「現実の蓄積の拡張の結果」であり，一部は「現実の蓄積の拡張」とは「まったく違った諸契機の結果」であるということ，そして，循環の或る一局面では「資本の過多」が発生せざるを得ず，それと同時に「過剰取引，過剰生産，過剰信用」が発生せざるを得ないということを主張している。これによって，マルクスは，「資本の過多」と「過剰生産」との間に一定の関連があることは認めているが，しかし，彼は，同時に，「貨幣資本の蓄積の拡張」は「現実の蓄積の拡張」とは「まったく違った諸契機の結果」である場合もあることを指摘し，「資本の過多」と「過剰生産」との間の関連は，それほど単純なも

87) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S. 586：MEW, Bd. 25, S. 523－524：『資本論』(7), 336頁。

のではないことを指摘している。

⑧「『エコノミスト』は次の文句のなかで，貨幣資本の過剰［*superabundance of moneyed capital*］…を資本一般の過剰（*superabundance of capital überhaupt*）と同一視しようと努めている。」[88]

ここでのマルクスの論述に対して，大谷禎之介氏は次のようなコメントを与えている。すなわち，マルクスの「批判の焦点は，moneyed Capitalと実物資本＝生産資本との同一視であり，この批判を通じてマルクスが強調しているのは，moneyed Capitalと実物資本との区別とそれらの対立的運動の把握の必要である。」[89]。大谷氏が指摘されるように，マルクスは，この叙述に続けて以下のようなことを言う。

⑨「そうではなく，ただただ，上述の事情のもとでは貨幣資本にたいする需要がこの利潤に比例しては増大しないから，つまり実物資本とは違った運動をするからなのだ。」[90]。

ここでは，「貨幣資本」は「実物資本とは違った運動をする」ことが指摘されている。しかし，マルクスは，そのように指摘をするだけで，「貨幣資本の過多」と「現実資本の過剰」との間にどのような関係があるのかということについてそれ以上に立ち入った分析・言及を行っていない。

以上，『資本論』第3部草稿第5章における幾つかのマルクスの論述を見てきたが，結局，「貨幣資本の過多」と「現実資本の過剰」については以上僅かばかりのことが明らかになっただけであり，それ以上立ち入ったことは何ら明らかにされていないというのが，『資本論』草稿第5章における「貨幣資本と現実資本」論の現状であると言わざるを得ない。『資本論』草稿第5章において，マルクスは，「資本の過多Plethora of capital」とは，実は「貨幣資本の過多Plethora of moneyed capital」のことであるということを

88) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S.635.
89) 大谷禎之介「『貴金属と為替相場』(『資本論』第3部第35章)の草稿について－『資本論』第3第1稿の第5章から－」『経済志林』第69巻第3号，2001年12月，76頁。
90) ＭＥＧＡⅡ-4-2, S.636：MEW, Bd.25, S.600：『資本論』(7), 476頁。

確認しうる地点に到達し得たとはいえ，いまだ，この「貨幣資本の過多」概念についてそれ以上に詳しく規定することができていない――すなわち「貨幣資本の過多」と「資本の過剰生産」との関連性を解明し得ていない――ということである。『資本論』草稿第5章に至るまで「資本の過多」と同一視・等値していた「資本の過剰生産」については，周知のように，ある程度明確な概念規定を与えているにもかかわらず，他方の「資本の過多」については，「資本の過剰生産」の運動との間にどのような関連を有するのかということをいまだ十分に分析していないということである[91]。

Ⅵ. むすび

筆者は，これまで，『資本論』第3部草稿筆写ノート（佐藤「アムステルダム・ノート」）やＭＥＧＡ所載の『資本論』第3部草稿を利用して，マル

91）『資本論』第3部草稿第5章のあと，第6章中の1箇所に，「資本の過多」なる用語を含む叙述（ＭＥＧＡⅡ-4-2，S.712：MEW，Bd.25，S.778：『資本論』(8)，259頁）が出現するが，「資本の過多Plethora des Capitals」概念の理解を助けるものではないと判断した。
『資本論』第3部草稿執筆後に，マルクス自身が出版に関与した『資本論』第1部各版には，「過多plethora，pléthore」という用語はごく少数単体で出現するが，「資本の過多」なる文言は出現しない。例えば初版では，「かりにも地代や利潤が『過大』でありうるとか，それらの過多（plethora）が人民の貧困の過多（Plethora des Volkselends）となにか関連があるとかいうようなことは，もちろん，『不名誉』でもあれば『不健全』（unsound）でもある考え方である」（ＭＥＧＡⅡ-5，S.573；Karl Marx，*Das Kapital，Kritik der politischen Oekonomie，Erster Band*，1867，S.697：『資本論』(3)，352-353頁）。同様の論述は，第2版（ＭＥＧＡⅡ-6，S.642），第3版（ＭＥＧＡⅡ-8，S.665）でも見られ，フランス語版（ＭＥＧＡⅡ-7，S.628―「pléthora」），英語版（ＭＥＧＡⅡ-9，S.617）でも見られる。因みに，第4版では，ＭＥＧＡⅡ-10，S.639に見られる。
『資本論』第2部第2草稿の第2章には，「貨幣資本の過多*Plethora v. Geldkapital*」なる用語が1箇所出現するが，マルクスは，この「貨幣資本の過多」の意味を，本稿で見てきた「貨幣資本の過多」すなわち『資本論』第3部草稿第5章の「貨幣資本の過多plethora of moneyed capital」とは異なるものであることを注意している。Karl Marx，*Manuskripte Zum Zweiten Buch Des "KAPITALS" 1868 bis 1881 in：Karl Marx／Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*，Abt. Ⅱ，Bd. 11，2008，Akademie Verlag，S.271. これに対応する箇所は，Karl Marx，*Das Kapital，Karl Marx-Friedrich Engels Werke*，Bd.24，Dietz Verlag，Berlin，1963，S.285：岡崎次郎訳『資本論』大月書店，国民文庫版(5)，1972，49-50頁。

クスの「資本の過剰生産」概念とは何かということを考察してきたが，その過程で，実は，筆者は，つねに，<「資本の過多」とは何なのか>という疑問を懐いてきた。本稿では，この問題を正面から考察した。

マルクスがはじめて「資本の過多」に言及しているのは，「1861－63年草稿」ノートXVI記載の草稿「第3章 資本と利潤」である。同草稿の利潤率低下法則論の冒頭で，マルクスは，「資本の過多」という文言を突然持ち出している。しかし，その意味内容を一切述べていない。しかし，そのあと，利潤率低下法則を少しばかり議論したのち，マルクスは，利潤率低下と「資本の過多」との関係について若干の説明を加えている。すなわち，「利潤率の低下」が進行すれば，「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本」が発生する・「資本の過多」状況が発生することになる，と。この説明は，『資本論』第3部第3篇第15章第3節における説明と殆ど同じ内容である。

「1861－63年草稿」ノートXIIIにおいてはじめて，マルクスは，「資本の過多」について，草稿「第3章 資本と利潤」におけるよりも遙かに詳しい議論を展開している。それは，マルクスの「資本の過多」論の出発点とも言うべきものである。しかし，そこでは，「資本の過多（plethora of capital)」と「資本の過剰（superabundance of capital)」とが概念的に区別されず，同一視されている。「plethora oder superabundance of capital」という表現はそのことを端的に表わしている。続く論述で，マルクスは，「資本の過剰生産」概念に独自な規定を与えよう試みているが，しかし，その規定は，明らかに同義反復的な規定である。

『資本論』第3部草稿における「資本の過多」に関する論述は，エンゲルス編集『資本論』の第3部第3篇第15章第3節冒頭に対応する草稿箇所にはじめて登場する。「資本の過多Plethora des Capitals, Plethora von Capital」という文言がまたもや突然登場するが，その意味内容が理論的に説明されていない。それは「利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本…の過多（Plethora von Capital）に…関連している」と注釈されているだけである。

この冒頭文章に続けて，「資本の過剰生産」についての本格的な議論が始

まる。まず,「資本の絶対的過剰生産」についての説明が行われる。その内容は,「1861－63年草稿」ノートXⅢ段階における「資本の過剰生産」・「資本の過多」の概念規定に比べれば,遙かに理論的に明確化したものである。さらに,「現実の資本の過剰生産」概念について議論が続けられる。これらの議論を通じて,要するに,マルクスは,資本が労働者を「与えられた搾取度」で充用できるかどうかが「資本の過剰生産」=「資本の過多」であるかどうかの基準であるということを主張しているのである。この内容は,「1861－63年草稿」ノートXⅥおよびノートXⅢにおける規定と対比すると,かなり理論的に明確化されたものであると言えよう。

『資本論』第3部第3章草稿段階では,このように「資本の過剰生産」を明確に規定するようになったのであるが,マルクスは,なお,「資本の過剰生産」と「資本の過多」とを同一視し,両者を等置している。それを端的に現しているのが,「個々の商品の過剰生産ではなく資本の過剰生産(=資本の過多)Ueberproduction von Capital(=Plethora von Capital)」という表現である。

『資本論』第3部草稿第5章部分には多数「資本の過多Plethora of capital」という表現が出現する。ここではじめて,マルクスは,「資本の過多」と「資本の過剰生産」とを明確に区別し,しかも両者の関係を問う問題を提起している。「いわゆる資本の過多」という「表現は,つねに貨幣資本について用いられるものである」と,はじめてこの用語の意味を明言している。以後,「資本の過多」という用語に代わって,「貨幣資本の過多Plethora von moneyed capital, Plethora of moneyed Capital」という表現が使われるようになり,「資本の過多」と「貨幣資本の過多」の違いをも明確に意識・認識するようになる。これに伴って,「Ueberproduction von Capital」という用語が「superabundance of [productive] capital」「superabundance von [productivem] Capital」という用語に変更され,後者が多用されるようになる。こうして,『資本論』第3部草稿第5章段階において,マルクスは,「[貨幣]資本の過多」と「[生産的]資本の過剰[生産]」とを概念的に明確に区別す

るようになる。

用語の変更を行ったとしても，両者の関係をどのように捉えるかという問題が残されている。マルクスは，「資本の過多Plethora of capital」とは，実は「貨幣資本の過多Plethora of moneyed capital」のことであるということを確認し得ていたとはいえ，ここに至ってもまだ，彼は，この「貨幣資本の過多」概念を明確に規定することができていない。マルクスは，「資本の過剰生産」について明確な概念規定を与えているにもかかわらず，他方の「貨幣資本の過多」については，「資本の過剰生産」との間にどのような関連を有するのかということをいまだ十分に分析していないのである。

（まつお・じゅん／経済学部教授／2012年8月2日受理）

The Formation of Marx's Concept of "Plethora of Capital"

MATSUO Jun

Chapter 15 of Volume III Part III: "The Law of the Tendency of the Rate of Profit to Fall" in the published edition of *Das Kapital* contains many themes that have an important bearing on efforts to develop the theory of crisis based on Marx's methodology. One of the most important problems among these is the theory of "overproduction of capital."

On previous occasions, I have used the hand-copied notes of the manuscript of Volume III of *Das Kapital* taken by Professor Kinzaburo Sato and the manuscript of Volume III of *Das Kapital* (*Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe*, Abt. II, Bd. 4, Teil 2, 1993) to carefully analyze portions of the manuscript related to this problem and to present my own understanding.

Throughout this process, I have always been puzzled by the term "plethora of capital" used by Marx whenever referring to "overproduction of capital." While analyzing the theory of "overproduction of capital," I have continuously wondered what is meant by "plethora of capital." It is my intention to directly examine this question in this paper.

Marx first uses "plethora of capital" in the manuscript of "Chapter 3: Capital and Profit" appearing in Note XVI of the "Manuscripts of 1861–1863." In this manuscript, Marx suddenly introduces the term "plethora of capital" at the start of his discussions of the law of the falling rate of profit, but at this point gives no explanation of the meaning of the term. Later, af-

ter briefly discussing the law of the falling rate of profit, Marx provides some explanation of the relation between the falling rate of profit and "plethora of capital." That is, Marx states that with the progression of the "falling rate of profit," "the falling rate of profit" gives rise to a great number of capitals that can't find no compensation in its mass for the fall in the rate of profit.

This explanation is nearly identical to the explanation contained in Volume III Part III Chapter 15 Section 3 of *Das Kapital*.

Next, in Note XIII of the "Manuscripts of 1861–1863," Marx for the first time discusses "plethora of capital" in far greater detail than in the manuscript of "Chapter 3: Capital and Profit." This can be identified as the starting point in Marx's theory of "plethora of capital." However, in this exposition, the concepts of "plethora of capital" and "superabundance (overproduction) of capital" are viewed as the same and are not differentiated. This is clearly represented in the expression, "plethora or superabundance of capital" and results from the fact that no positive effort is made to examine whether "overproduction of capital" is a concept with its own unique prescriptive content. While Marx attempts to assign a unique prescriptive content to the concept of "overproduction of capital" in the exposition that follows, it is clear that this prescription is tautological.

The expositions concerning "plethora of capital" contained in the manuscript of Volume III of *Das Kapital* first appear in the section of the manuscripts of *Das Kapital* that corresponds to the beginning of Volume III Part III Chapter 15 Section 3 of Engel's edition of *Das Kapital*. Here again, the term "Plethora des Capitals, Plethora von Capital" appears suddenly with no theoretical explanation of its meaning. The only comment given is that this is "related to Plethora von Capital that finds no compensation in its mass for the fall in the rate of profit."

A full-fledged discussion of "overproduction of capital" begins after this introductory statement. First, an explanation is given concerning "absolute overproduction of capital." The content of this explanation has far greater theoretical clarity than the definition of the concepts of "overproduction of capital" and "plethora of capital" given in Note XIII of the "Manuscripts of 1861–1863." The discussion thereafter continues to examine the concept of "real overproduction of capital."

In this discussion, Marx ultimately provides a very clear definition in which he states that the question of whether capital can use labor at the "given degree of exploitation" provides the standard by which it can be determined whether a capital is equal to "overproduction of capital." This is a considerably clearer theoretical definition compared to the presentations given in Note XIV and Note XIII of "Manuscripts of 1861–1863."

Thus, while "overproduction of capital" was clearly defined at the manuscript stage of Volume III Part III of *Das Kapital*, Marx continues to view "overproduction of capital" and "plethora of capital" to be the same and to equate the two. This is clearly reflected in the expression, "....not the overproduction of individual commodities but Ueberproduction von Capital (= Plethora von Capital)...."

"Plethora of capital" is used on numerous occasions in the manuscript of Volume III Chapter 5. Here, Marx clearly differentiates between "plethora of capital" and "overproduction of capital" and poses a question concerning the relation of the two. Marx starts the discussion by clarifying the meaning of this term by stating that "so-called plethora of capital" "is a term that refers always to plethora of moneyed capital." Thereafter, instead of "plethora of capital," Marx uses the expression "Plethora von moneyed capital, Plethora of moneyed capital," indicating a clear awareness and recognition of the difference between "plethora of capital" and "plethora of

moneyed capital." Subsequently, the terminology used by Marx shifts from "Ueberproduction von Capital" to "superabundance of [productive] capital, "superabundance von [productive] Capital," and the latter expression comes to be used extensively. In this way, Marx comes to clearly differentiate between "plethora of [moneyed] capital" and "plethora of [productive] capital [production]" in the manuscript stage of Volume III Chapter 5.

The shift in terminology aside, the question remains on how the relation between the two concepts should be understood. "So-called plethora of capital – does this constitute a special phenomenon that parallels overproduction, or does it merely constitute a special method for expressing overproduction?"

While Marx confirmed that "plethora of capital" actually refers to "plethora of moneyed capital," he was never able to define the concept of "plethora of moneyed capital." Although, the concept of "overproduction of capital" has been clearly defined, on the other hand, sufficient analysis has not been undertaken on the relation between "plethora of moneyed capital" and "overproduction of capital."